

瀬戸内最古の土器

幸 泉 満 夫

1. はじめに

本稿は、環瀬戸内海沿岸域で最古となる南九州由来の隆帯文系土器発見を契機に、当該地方周辺における縄文時代草創期土器導入期の様相について、考察を試みようとするものである。

今回取り上げる土器は、愛媛県松山市の北梅本乙井（おとい）遺跡（以下、乙井遺跡と省略）第Ⅳ層出土の土器片のなかに含まれていた（写真1・2、第2図）。左記資料を2012年度末に公開した松山市刊行の発掘報告書では、時期、型式名ともに十分な検証を経ないまま、山形押型文土器等（第3図）の共伴を理由に「縄文時代早期前葉に時期比定される」と結論付けられている（水本編2012p121）。

遡ること2012年の秋、同市の依頼により予め資料実見の機会に恵まれていた筆者は、まず草創期の可能性を疑っていた。けれども、当時は土器内面に残る“二枚貝条痕”の存在がどうにも腑に落ちず、断定を躊躇していた（写真1右下）。南九州隆帯文系の器面には貝殻条痕は存しない、そう長らく学界で周知されてきたためである（雨宮1997bp25、児玉1999p147・2008p29-32、下山・鎌田1999p19、松本2002p404、村上2003p19・2005p10・2006p16・2007p14・2014p82ほか）。さらに、早期後半における広義の条痕文系末期、なかでも南九州における西之菌式や、在地の中津川式（いわゆる羽島Ⅰ式系統）等、かなり時期



写真1 瀬戸内最古の土器（乙井第1号土器）
（松山市乙井遺跡第Ⅳ層出土 / 松山市蔵 / 筆者撮影）

の下る可能性も同時に思料されたためである。仮に、南九州隆帯文系の伝播となれば、その学術的価値は計り知れないだろう。しかしながら、瀬戸内地方では未だ実態不明な時期だけに、型式認定のためには、南九州等での慎重な実地調査が欠かせない。そう判断し、当時は結論を保留した経緯がある。

本稿では、遅ればせながら、その後の筆者自身による南九州をはじめとした周辺各地の類例調査結果を纏め、この、草創期帰属の可能性を有する稀有な土器片を再評価することで、過去の責任を果たしておきたい。

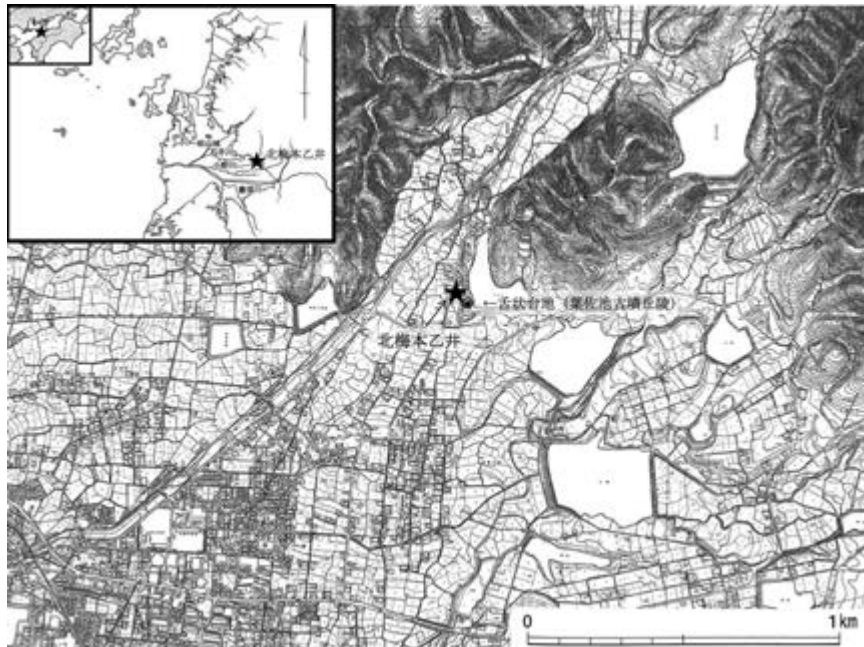
2. 乙井遺跡出土の未知の土器片

(1) 遺跡の概要

遺跡は四国西北部、愛媛県の松山平野南東部に位置する（第1図左上）。写真1・2の土器は、標高約102mを測る舌状台地西側の縁辺部より出土した（同図中央の星印）。隣接する葉佐池古墳の史跡公園整備に伴い、2012年9月の緊急発掘で偶然、包含層第IV層より検出されたものである。第IV層は、現地表面より約50cm下で到達する橙色シルト質系の土層で、層厚約30～40cm程度を測る。層中には拳大前後の多量の自然礫を不自然に含むとされる¹⁾。報告書によると、同層は、さらに土質や色調等を頼りに①～④層に細分できるという。けれども報告書第4～5図に示される通り、それらは地層累重の法則に沿った自然堆積を示すものではないだろう。不自然なブロック状、ないしは断続的な縦位の分層により幾重にも区分されていることから理解できるように、一種の攪乱状態を示唆するからである。報告書では、出土した土器片がこうした分層結果からは細別できないとも明記されている（水本編2012p120）。さらに直上の第Ⅲ層からは、古墳時代～古代の土器片が複数点出土している。

次に、第1図に掲げた周辺地形を確認しておこう。乙井遺跡の東隣には、近年、国史跡に指定されたばかりの葉佐池古墳が後世に築かれている。6世紀代の所産である。周辺には該期以降の須恵器窯跡群や、近世以降の溜池も集中しており、本来の自然地形は、かなりの人為的改変を被ってきたと見做してよい。

この葉佐池古墳が、松山平野南東部を広く見渡せる孤高の舌状台地の頂上先端部付近（墳頂の現標高約121m、乙井遺跡との比高差約19m）を巧みに利用して築かれたことは、云うまでもない。乙井遺跡第IV層出土の件の土器は、早期前葉の土器片とともに一種の攪乱状態で出土したと述べたが、その直上に、整地に基づいた人為の水平堆積層、古墳時代～古代の第Ⅲ層が形成されている様を鑑みれば、本来、舌状台地の頂上縁辺部付近には縄文集落が形成されていたと捉えるべきなのである。のち、6世紀代の古墳築造に伴い、縄文遺跡は完膚無きまでに削平され、独立丘陵縁辺に廃棄さ



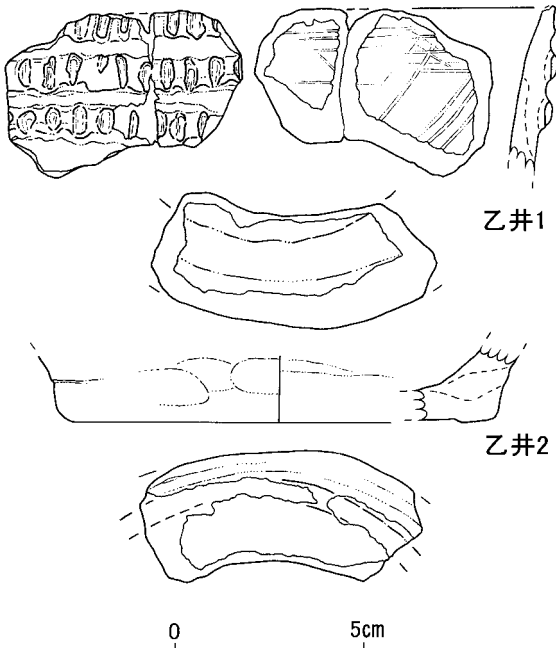
第1図 遺跡の位置と周辺の現地形
(栗田編2010を基図に筆者作成)

れた結果、丘陵の麓に二次堆積たる第Ⅳ層が、直上の第Ⅲ層（6世紀当時の整地層）にパックされる形で遺存していたと推察できるのである²⁾。

(2) 未知の土器片

つづく第2図には、乙井遺跡第Ⅳ層出土資料群のうち、草創期帰属の可能性が持たれる土器2点を図示した。何れも、深鉢ないしは鉢形と考えられる。

第2図1（「乙井第1号土器」、以下、乙井1と略称）は直口砲弾形と推測される深鉢の口縁部片である。色調は、外面が鈍い黄橙色（10YR6/4）、内面は灰黄褐色（10YR6/2）を呈する。口縁部に沿い、しっかりとした三条の隆帯（太めの隆線）文が並行して貼付けられている。各隆帯の幅は8～9mmと隆（起）線文系よりも太く、隆高も約3mmと明瞭である。すなわち、従来の上黒岩岩陰遺跡や穴神洞窟遺跡で確認されてきた「隆（起）線文系」とは明らかに施文手法が異なる。可能性として、いわゆる南九州を中心に分布する「隆帯文系」との関係がまず想起される。南九州の隆帯文系と比較するならば、後述するように、その後半段階と最も近似しよう。隆帯上に



第2図 瀬戸内最古の土器
(松山市乙井遺跡出土 / 松山市蔵 / 筆者原図)

は丸棒状工具により、鉛直方向に深く押し込んだ連続刻目（直刻）文が看取できる³⁾。刻目の幅は3～4mm、深さも3～4mm程度で、上下長は6～8mmと深く明瞭である。成形は、上端を略ソケット状に摘む外傾接合を呈している（第2図、写真1参照）。器厚は7mmで、早期の西之園式等よりも若干厚い。焼成は、上黒岩や穴神洞等、愛媛県内の隆（起）線文系と比べれば押し並べて堅致であるが、表層下は黒化層（黒褐色10YR3/2）で占められており、やや脆弱とも云えよう。胎土中には径2mm以下の石英、長石、角閃石を5～10%ほど含有する。特に

方柱状を成す黑色透質の角閃石が目立っており、在地製の土器ではない。東～南九州方面からの搬入の可能性が想起されよう。なお、繊維状物質の混和は一切認められなかった。さて乙井1で最も注視すべきは、内面の二枚貝条痕である。すなわち外器面はナデであるが、図示するように、内面には明瞭な二枚貝条痕が残されており（条痕後ナデ）、特筆に値しよう（写真1右下）。条幅2mm、条間2mmで、各条線の断面形状は貝殻条痕特有の角樋状を成す。また条内には擦過状の筋が数条、併行して走る。具体的には、放射肋の目立つ臨海部砂泥底種のアカガイ（アナダラ）属二枚貝を調整工具として採用しており、その殻表面～腹縁部を用いたと推定できよう。しかし、仮に草創期前半の隆帯文期と見做すにしても、未だ、南九州域ではそうした土器の存在が認識されておらず、極めて特異な個体ということになる。

第2図2（「乙井第2号土器」、以下、乙井2と略称）は円盤平底状を成す深鉢、ないしは鉢の底部片である（写真2）。色調は外面が鈍い橙色（5YR6/3）、内面は鈍い赤褐色（5YR5/4）を呈する。いわゆる平丸底ではない。外縁部には約1mmの段差が

あり、幅10mm前後から成る接地面が意識的に設けられている。このことから、厳密には低平高台底の一種に分類できよう。底径は10.6cm、器厚は底面中央で約9mm、胴部下端で約10mmと厚手である。成形は円盤状の粘土塊を基盤に、胴部以降を順次積上げていく内傾接合法を採る。胴部がやや外傾する点も特徴的である。仮に草創期とすれば、既に村上昇が指摘する通り、古豊後水道周辺圏の特色を成す可能性も考えられよう（村上2005p8）。内外面ともにナデによって仕上げられており、外面の一部には淡い指頭痕を残す。焼成は乙井1に比して相対的に堅致であるが、同じく表層下は黒化層（褐灰色10YR4/1）で占められており、やや脆弱である。胎土中には径2mm以下の石英、長石、花崗岩、金雲母片が15～20%程度含まれており、広義の在地産（瀬戸内領家帯内）と推定される。繊維状の混和物は確認できない。いわゆる南九州早期の貝殻文円筒形土器や、平底押型文土器の可能性は低いと云わざるを得ないだろう。

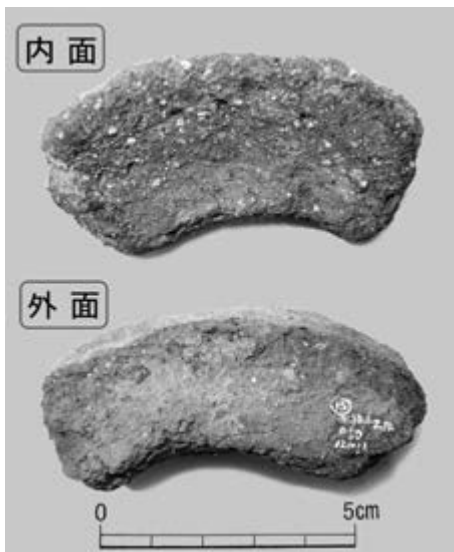


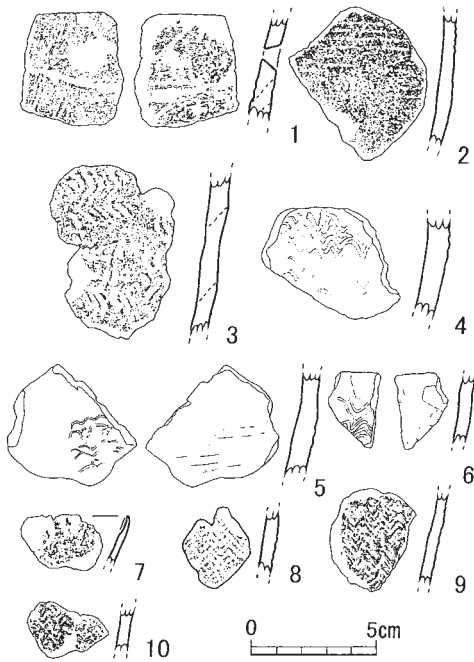
写真2 底部 乙井第2号土器片

（松山市乙井遺跡第IV層出土／松山市蔵／筆者撮影／第2図2）

(3) 第IV層伴出の縄文土器

ここで第IV層伴出の、やや、時期の下る土器群についても紹介しておこう（第3図）。1・2は条痕文系。1の外面には斜位の、また内面にも、斜位および横位の二枚貝条痕が、2は、外面のみに横位の二枚貝条痕が窺える。条痕幅は1が1.5mmと乙井1に近いが、2は1mm前後と浅く繊細である。器厚6～7mmとやや厚手で、焼成は比較的堅致である。1・2ともに胎土中には繊維状の混和物を含まず、代わりに石英、長石の混和が認められた。加えて1については角閃石が多く含まれており、一見、乙井1と類縁する。ただし、第3図1はその外面に顕著な斜行条痕の存在が確認できるほか、条痕内には乙井1のような擦過状の筋が観察できない点、並びに、胴部破面には内傾接合が観察されたことから、やや時期の下る別個体と認定できよう。

第3図3～10は早期の押型文土器。文様は、すべて山形文である。うち3～6は器厚8mm前後と厚手の一群である。条痕や繊維の混和は認められない。いずれも回転押



第3図 乙井遺跡第IV層伴出の土器

(松山市乙井遺跡出土 / 松山市蔵 / 水本編2012を基図に筆者再編・一部再実測)

第3図7～10は薄手の山形押型文土器である。文様の振幅が狭く、肌理が細かい。内器面は丁寧なナデ調整となる。7は、第IV層資料群としては稀有な口縁部片である。器厚3mmと極めて薄手で、内面には山形押型文のほかに、連続する縦位刻をしっかりと施文している。外面は磨滅のため不明であるが、同等の押型文が回転押捺されていた可能性が高いであろう。いわゆる黄鳥式成立以前、早期前葉のプレ黄鳥式段階に比定できる。残る8～9も器厚4～5mmと薄手で、山形文も緻密さを維持していることから、下っても黄鳥式古段階までに比定可能となろう(中越1991ほか)。

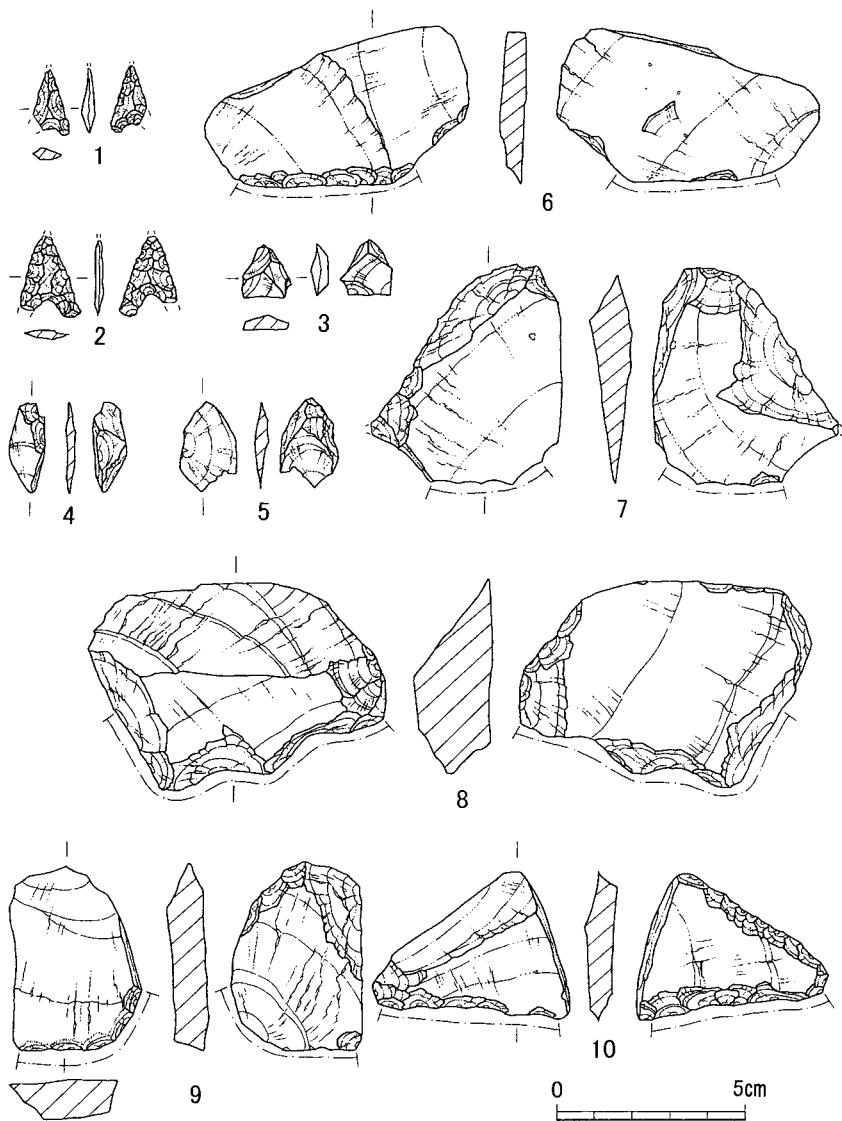
以上のように、乙井遺跡第IV層からは乙井1・2とは別に、草創期後葉～早期中葉までに比定できる土器群が出土している。以上の筆者の解釈が正しければ、同包含層は古墳時代に再堆積した二次層であり、含有遺物群は、そもそも単一時期を示すものではないと解釈できよう。

(4) 第IV層伴出の石器

つづいて、第IV層出土の石器全点を図示する(第4図)。縄文早期までの時期幅が

捺が不明瞭で、山形文は幾分振幅が広い。施文は、外面のみに施されている。このうち3は、胴部に縦位施文を採る例である。整然とした山形文を特徴とする土器で、意匠崩壊が進む穂谷式や手向山式とは多少原体が異なる。下菅生B式、ないし出水下層式に帰属する可能性が高いものの、より古相の大川式や桑ノ丸式前後に併行する可能性も完全には否めないであろう⁴⁾。こうした厚手山形押型文土器については従来、安易に早期後半として認定されがちであったが、瀬戸内周辺域における押型文導入期の様相を把握するうえでも、将来的には再吟味を要する可能性のある一群と云えるだろう。

第3図7～10は薄手の山形押型文土器である。文様の振幅が狭く、肌理が細かい。内器面は丁寧なナデ調整となる。7は、第IV層資料群としては稀有な口縁部片である。器厚3



第4図 松山市乙井遺跡第IV層出土の石器
(松山市蔵 / 筆者原図)

想定される。なお植物加工系礫器の有無については、不明とせざるを得ない。

1・2は石鏃である。ともにサヌカイト製の凹基鏃で、全形は3対2、幅より長軸が長い二等辺三角形状を呈している。うち大型の2は、中央の挟りが深い逆V字状を成し、基部両脇の脚部もしっかりと作出されていることから、早期に属する可能性が高いであろう⁵⁾。対する1は挟りが浅く、型式学的には2よりも古相を示唆する可能性がある。後述する高知県奥谷南遺跡 SX101や、鹿児島県鬼ヶ野遺跡出土の草創期鏃の一部とも類縁しよう。3は姫島産黒曜石製の石鏃未製品である。素材剥片における縁辺部二次加工の途上で製作放棄したと考えられる例である。鹿児島県鬼ヶ野遺跡では姫島産黒曜石製の、いわゆるブーメラン形に近い正三角形鏃が1点出土しており（写真3）、昨今では、素材のみを論拠に早期と断定することも難しい⁶⁾。

4・5は、サヌカイト製の剥片である。うち4は石鏃製作を目的とした素材剥片の可能性がもたれる。時期特定は至難だが、出土層位から、ともに草創期～早期に伴うと見做されよう。

6・10はサヌカイト製のサイドスクレイパー、7は同素材による使用痕ある剥片である⁷⁾。うち7・10には、刃部と対極位置に背潰しを目的とした入念な急角度調整が施されている。6・7・10はその出土層位から、草創期～早期に帰属しよう。

8・9は、硬質の白色珪質系の頁岩を素材とするスクレイパー類である。8は、刃部中央が凸状を成す工具の一種で、大分県森ノ木遺跡（綿貫編2016）等に類例がある。全長5.2cm、全幅7.3cm、厚さは20mmと肉厚である。9はエンド・スクレイパーの一種で、全長5.0cm、全幅3.4cmの略方形を呈する。厚さ10mmと、肉厚の剥片を採用する点に特徴がある。下縁には急角度調整による連続した刃部加工が施されており、表面の刃部縁辺にはナメシ系の使用痕と類推される長軸方向の磨耗痕等が僅かに看取で

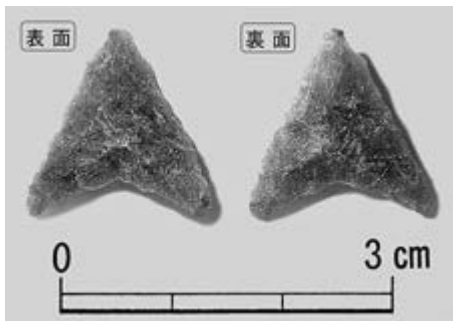


写真3 種子島における草創期姫島産と目される黒曜石製の石鏃事例（第11図13）
（鬼ヶ野遺跡出土 / 西之表市蔵 / 筆者撮影）

きる。石材は8とは同一ではないが、白色硬質の珪質頁岩等を採用する点で両者は共通する⁸⁾。以上の白色珪質系頁岩製の石器は、上記6・10のサヌカイト製スクレイパーとは製作技法の違いが明確であることから、乙井1・2に伴う可能性も考えられよう。

瀬戸内周辺域に類例が存しない現状において、上記の石材、製作技法、ならびに形態的特徴のみからでは、厳密な意味での草創期石器の抽出は困難である。第IV層石器の検証結果から云え

ることは、第一に有舌尖頭器や柳葉状小形尖頭器、細石器等が一切確認できていない点、そして第二に、白色珪質系頁岩製の石器が上記乙井1・2の土器に伴う可能性がある、という2点に留まろう。

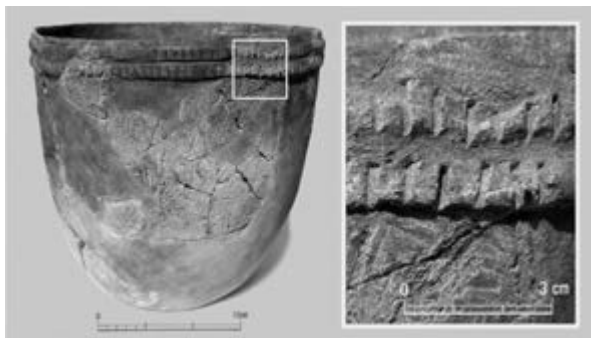


写真4 西之菌式土器

(日出町エゴノクチ遺跡出土 / 大分県蔵 / 筆者撮影)

(5) 早期の可能性

ここで予め、草創期の

隆帯文土器と視覚的特徴が類縁する早期土器についても検証を加えておこう。冒頭で記した通り、乙井1内面の二枚貝条痕の存在が特に懸念されるためである。隆帯数の異なる羽島下層I式や長山(馬籠)式等については敢えて論ずるまでもないが、九州の西之菌式(柴畑2008・2015ほか)については、特に、その相異点を明確にしておく必要がある。

写真4には、乙井遺跡から最も近い位置にある大分県日出町エゴノクチ遺跡出土の西之菌式深鉢例を掲げた。視覚レベルでの類似性が特に疑われる個体である(高橋編1993p201No11)。乙井1の隆帯文土器とを実際に比較するならば、第5図に列記するような相異点が抽出できる。そもそも口縁部の隆帯は、東方の茅山下層式に由来するものであって、隆帯は一〜二条を原則とする。三条は稀である(柴畑2015p27)。また

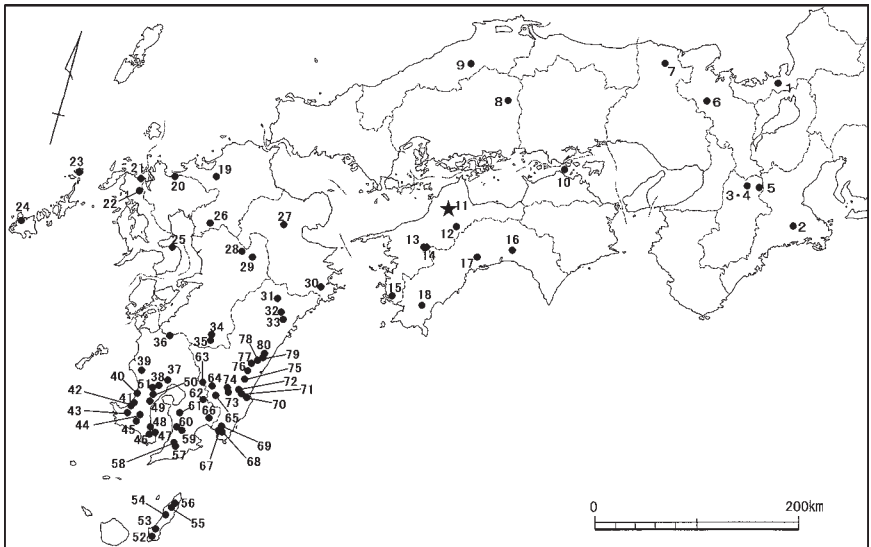
写真4右側の拡大画像で示す通り、隆帯上の施文は一般的に細く鋭利であり、断面は略三角形を呈するものが多い。三条を示す稀少例では一層隆帯が細くなり、後続の轟B式に準じて鋭利となる。加えて、今回筆者が注視する二枚貝条痕の

- (A) 草創期の隆帯文系における刻目には、ユビ爪形、ユビ腹のほかへら、丸棒、二枚貝殻頂部による押圧等といったバリエーションがある。
- (B) 隆帯文系では、口辺部の成形をソケット状の外傾接合とする例が多いが、西之菌式では内傾または水平接合を原則とする。
- (C) 西之菌式では、轟A式からの継承要素として、二枚貝腹縁の擦過による格子目文や波状文が加わる例が多い。
- (D) 対する隆帯文系では、二枚貝条痕はナデ後の消し忘れである場合が多い。従って、地文を強く意識した深く明瞭な条痕を内外全面、しかも縦横に覆う例は隆帯文系には存在しない。
- (E) 早期の条痕文系の特徴として、胎土中に繊維を混和する例が少なくない。対して、乙井1・2をはじめ、南九州隆帯文系には認められない。
- (F) 西之菌式前後では色調が暗灰〜黒褐色を呈する例が多い。また例外もあるが、器体内部に黒化層を残す例は早期には殆ど存在しない。
- (G) 早期の瀬戸内に大型の平底はない。尖底または丸底を前提としている。

第5図 南九州隆帯文系と西之菌式との相異点

態様であるが、西之藪式では写真4のように表裏とも深く明瞭に縦横展開する例が一般的である。さらに同型式では口辺～胴部外面に斜格子等の条痕文を加える例も多い。第5図(C)に記した通り、これらは前段の轟A式から継承される地文としての要素と見做される。

最後に第5図(G)で記した丸底であるが、瀬戸内側では早期以降、縄文前期前半まで継承されるものであり、製作技法上の根本的な違いとして認識できる。また西之藪式には小型平底の例も存在するが、前段の乙井2で示したような中～大型の平底は存在しない。以上から、乙井1・2が早期に属する可能性はほぼ否定できるだろう。



第6図 西日本における草創期土器出土遺跡の分布（一部早期初頭を含む）

(1鳥浜、2粥見井尻、3桐山和田、4北野ウチカタビロ、5上津大片刈、6武者ヶ谷、7神鍋、8帝釈馬渡・帝釈観音堂、9板屋Ⅲ、10羽佐鳥、11北梅本乙井、12上黒岩、13中津川洞、14穴神洞、15平城、16奥谷南、17不動ヶ岩屋、18十川駄場崎、19門田、20双水迫、21福井、22泉福寺、23城ヶ丘平子、24茶園、25小ヶ倉A、26横道、27二日市、28無田原、29河陽上、30森の木、31阿蘇原上、32蔵田、33岩土原、34狸谷、35白鳥平B、36上場、37建昌城跡、38加治屋園、39瀧之段・向栴城跡、40諏訪牟田・中尾・荒田、41栴ノ原・下東堀、42志風頭、43干河原、44牧野、45登立、46水迫、47岩本、48帖地、49掃除山、50仁田尾、51横井竹ノ山、52横峯C・D、53宮田・平松B、54三角山I・園田、55奥ノ仁田、56鬼ヶ野・屋久川、57ホケノ頭、58横高尾、59伊敷、60上楠原、61西丸尾、62桐木耳取、63水上第2、64堂山、65王子山、66東黒土田・鎌石橋、67三幸ヶ野第2、68西ノ園、69大平、70堂地西、71清武上猪ノ原、72上の原・椎屋形、73井手ノ尾、74砂田、75塚原・木脇、76別府原、77瀬戸口、78牧内・唐木戸、79尾花A、80国光原出土)

3. 四国地方における隆帯文系土器出土遺跡の類例

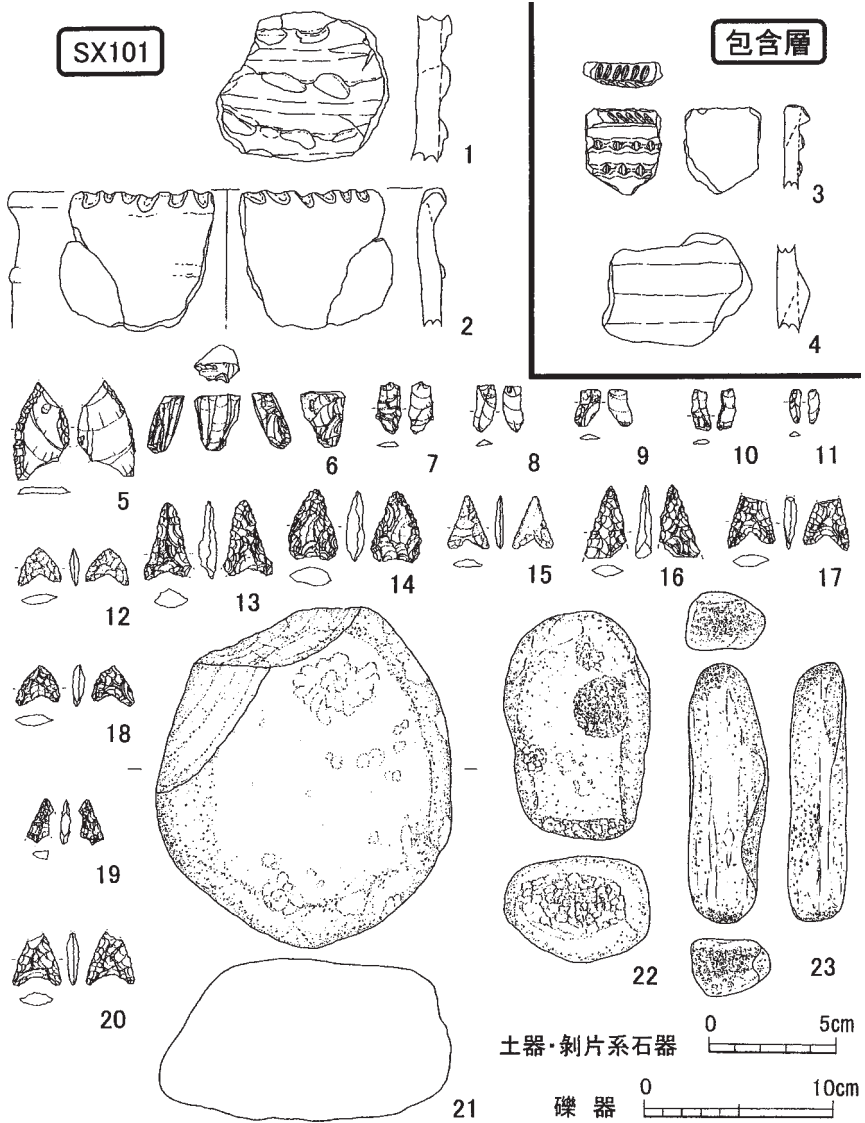
第6図には、西日本における草創期土器の出土遺跡を集成した。周知のことだが、当該期では南九州以外での出土事例は極めて乏しい。従って土器組成、石器組成、両者の共伴関係等、未だその大部分は藪の中にあるのが実状と心得ねばなるまい。

なかでも四国地方における草創期土器の出土事例は極めて少ない。後半の無文土器段階を含めて、愛媛県内では4件（久万高原町上黒岩岩陰遺跡、西予市穴神洞窟遺跡、中津川洞窟遺跡、愛南町平城貝塚遺跡）⁹⁾、隣接する高知県内でも3件（南国市奥谷南遺跡、佐川町不動ヶ岩屋洞穴遺跡、十和村十川駄場崎遺跡）が知られる程度であり、徳島県、香川県域では皆無に等しい¹⁰⁾。

これらのなかで上記乙井1・2と特に類縁関係にあるのが、奥谷南遺跡出土の草創期資料群である（第7図）。高知県埋蔵文化財センターによる1994年～1996年の精緻な緊急調査で、SX101および包含層中より検出された（松村・山本編2001）。

第7図1・2はSX101出土土器である。うち1は、南九州との関係性が想起される隆帯文（太めの隆線文）系（写真5上段）、2は隆（起）線文系に属するとされる。1の外面には幅14～16mmとしっかりとした隆帯が並行して貼付けられている。隆帯上には幅6～8mm、長さ14～18mm程度の指腹による浅い連続刺突文が、16～24mm間隔で付されている。後述する通り、鹿児島県奥ノ仁田遺跡や三角山I遺跡等、古相の出土事例において近似する土器がある。器厚は約9mmで、調整はナデ（内面は剥落により不明）、緩水平接合によって仕上げられており、焼成は比較的堅致である。乙井1と比較するならば、隆帯幅が極めて太い点と、施文手法（工具）において大きな差異が窺えよう。2の隆（起）線文系深鉢は口径24.4cm、器面調整は内外ともナデである。器厚が6mm前後で、第7図1とは明らかに製作技法が異なる。口唇部には太い刻目が付されている。内外双方向より個別に施文されて羽状を成すもので、幅4～6mm、約9mm間隔に施文される。その断面形状から、1とは異なり細い丸頭状工具を原体としていることが解る。これを表裏施文の亜種と解釈するならば、その帰属時期は第7図1と近接しよう。ここで1と2の伴出関係を重視するならば、南九州由来の隆帯文系と四国以東の隆（起）線文系との併行関係を考察する際の稀有な事例として、改めて注目に値するであろう。

第7図3・4は包含層出土の土器片である。うち3は器厚5～6mmと薄手である（写真5下段）。直口を成す口縁部外面には三条の、横位に並行する蒲針状隆帯が貼付けられている。隆帯の幅は5～6mm、間隔は4mm程度で、各隆帯間は丸棒状工具により区画を意図した凹線状の擦過調整痕を残す。口唇～口縁端部外縁にはヘラ状工具により連続する斜行刻目が羽状に施されている。対して、口縁二～三条目の隆帯上にみ



第7図 南四国域の隆帯文土器
 (南国市奥谷南遺跡出土 / 高知県蔵 / 松村・山本編2001より一部改変・筆者再実測)

る刻目は原体が異なる。丸棒状工具により略楕円形を呈する鉛直方向の直刻が、浅く連続して付されている。刻目の幅は口唇～口縁部が約2mm、口縁二～三条目隆帯が約3mmである。器面調整は内外面ともにナデで、二枚貝条痕は確認できない。乙井1とを比較するならば、全体的に萎縮の進んだ印象を強く受ける。後述する南九州との対比から、型式学的には奥谷南1→3の変遷が想定できよう。

以上に加えて、SX101では石器類が豊富に伴出している。チャート製の細石刃と細石核が複数伴う（第7図6～11）。報告書では草創期土器との時期差の可能性が指摘されているが、むしろ同一遺構内という出土状況からは、伴出の可能性を否定するだけの客観的な論拠に乏しいと云えよう¹¹⁾。

このSX101からは石鏃も豊富に出土している。有舌尖頭器は全く存在せず、代わりに正三角形に近い小型の浅凹基鏃と、二等辺三角形を成す中～大型の浅凹～凹基鏃が伴出している（12～20）。石材は主にチャート製であるが、12のようなサヌカイト製や、15の頁岩製のように、外来系を示唆する個体も散見できる。ただし芝康次郎や秋成雅博が指摘する、南九州域のような石材による作分け傾向（芝2014p42-43、秋成2015p12ほか）は、ここでは顕著には認め難い。このほか磨石、凹石、叩き石等が伴う（21～23）。豊富な石鏃に加え、これら植物加工系礫器が伴う点も、南九州隆帯文系文化に通ずる特徴と云えるだろう。

4. 南九州における二枚貝条痕を伴った隆帯文系土器群の再検証

乙井1・2の故地を探るためには、やはり南九州における類例調査が欠かせない。ここで焦点とすべきは“二枚貝条痕”を伴った隆帯文系土器が、南九州にも存在するか否かである。以下、検討を続けよう。

南九州では、1980年代以降に「太めの隆帯」（河口1982ほか）の存在が知られてきた。爾来、隆帯文系土器の検出事例は急増し、今日、西日本における草創期土器研究

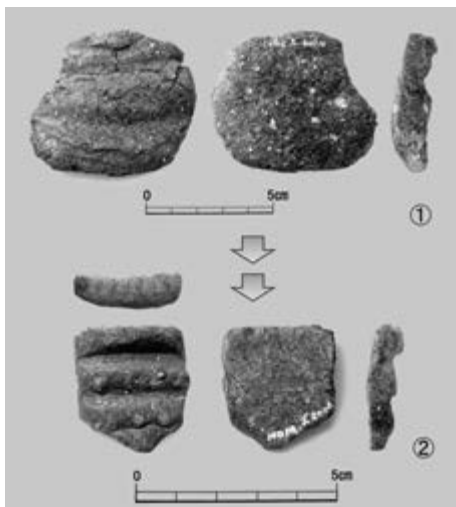


写真5 南四国における隆帯文系の変遷
（南国市奥谷南出土/高知県蔵/第7図1・3/筆者撮影）

の一角をリードするまでとなった（大塚1990・2008、雨宮1992・1994・1997ab、河口1994・1996、児玉1999・2008、日高1999、村上2000・2007・2014、工藤2011・2018、秋成2014・2015、今村2018、榎畑2019、堂込2019ほか）。しかしながら、これまでの精緻な資料観察や図示表現、写真図版公開の数々にも関わらず、依然、これら隆帯文系土器群のなかに“二枚貝条痕”が存在することを認め、積極的に評価しようとした先例は極めて少ない¹²⁾。本来ならば南九州における既存資料のなかから、別途、鈴木正博が指摘している北部九州の「横道系列」の存在を改めて探索すべきところであろうが（鈴木2005）、現状では水迫式（下山・鎌田1999）段階に二枚貝条痕が出現し、岩本式（雨宮1994ほか）を経て、南九州早期の貝殻文円筒形土器文化へと移行したという認識が、概ね定説化してしまっている感が否めない（村上2003p19-20ほか）。そしてその背景としては、やはり長崎県福井洞穴の層位事例等を重視した広域編年論の立場から、関東～九州の間で広く分布する多縄文や撚糸文系統から条痕文が派生し、南下するといった解釈（雨宮1997aほか）が、依然、南九州の該期研究を一方で支配し続けている可能性があるろう（下山・鎌田1999p19ほか）。何れにせよ、そうした学史的常識が、皮肉にも草創期土器における二枚貝条痕の存在把握を阻む一因を成してきたという事実は、否めないわけである。

従って、南九州の縄文土器文化を特色付ける二枚貝条痕成立の淵源を探る意味で



写真6 プレ隆帯文と堂地西段階の事例
（末吉町桐木耳取遺跡出土／鹿児島県蔵／筆者撮影／第8図1・6）

も、再検証を施す意義は大きいと云えよう。そこで以下では編年上、隆帯文成立のプレ段階に位置付けられる最古相の末吉町桐木耳取遺跡資料（長野ほか編2005）を皮切りに、前後資料が纏まって出土した南九州種子島の中種子町三角山Ⅰ遺跡（藤崎・中村編2006）、西之表市奥ノ仁田遺跡（児玉・中村編1995）、鬼ヶ野遺跡（沖田・堂込編2004）の諸例について順に取り扱う。さらに本稿では、本土側最新の事例として新たに注目される南九州市知覧町の牧野遺跡資料（福永・宗岡編2018）や、該期の東南九州側を代表する宮崎県都城市の王子山遺跡（榎畑・栗山編2012）における特異事例も取り上げつつ、以下、器面に二枚貝条痕を伴う隆帯文系土器のセーリ工構造

解明を目的とした検討を進めることにする。

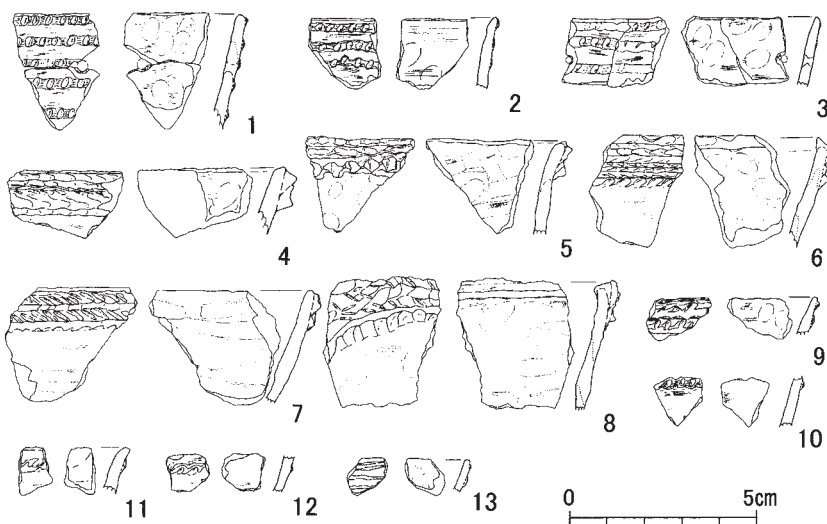
(1) 鹿児島県末吉町桐木耳取遺跡

草創期土器群はP-14桜島薩摩火山灰層 (Sz-S/Sakurajima-Satsuma P14 tephra/12,800cal BP; Okuno et al.1997、工藤2011ほか) 直下とされる包含

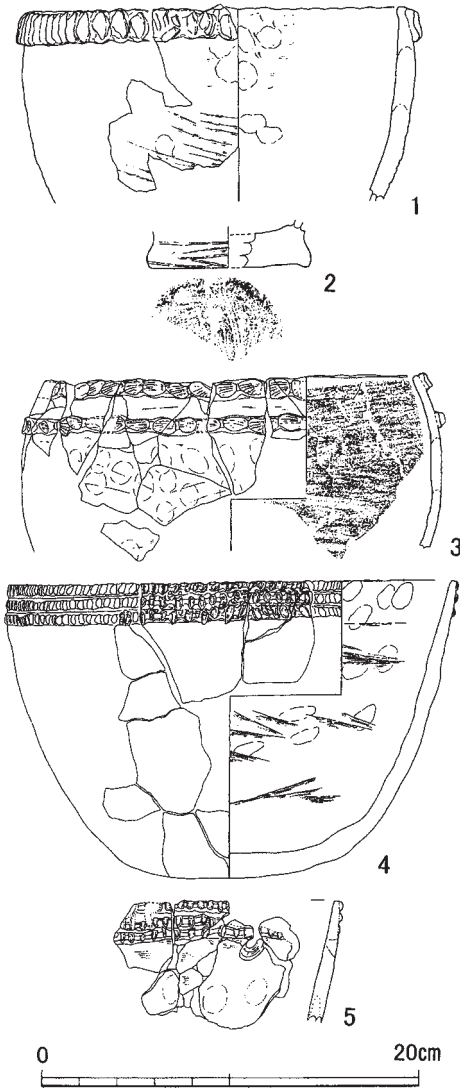
層第X層を中心に出土している。前段の南四国例と同様、依然、細石器群が残る可能性もある。出土土器には、3つのタイプがある。まず第8図1～3であるが、これらは南九州ではやや異質の存在である。隆帯幅が5mm前後と細く低平であり、器厚も6mm前後と比較的薄手を成す(写真6上)。大塚達朗が「多条型隆起線紋土器」と称する段階で(大塚2008)、近年、宮崎市清武上猪ノ原遺跡でも類例の存在が確認されている(秋成・今村編2009、秋成2015ほか)。後述する三角山I遺跡で型式学的に最古相と見做される隆(起)線文の一群とも近接する可能性が高いであろう。2つ目は隆



写真7 磨滅著しい細隆(起)線文系の土器小片(末吉町桐木耳取遺跡出土/鹿児島県蔵/筆者撮影/第8図10・12ほか)



第8図 桐木耳取遺跡出土の諸例(末吉町桐木耳取遺跡出土/鹿児島県蔵/長野編2005より一部改変・再実測)



第9図 隆帯文系前半の様相

(1・2 西之表市奥ノ仁田遺跡、3～5 中種子町三角山I遺跡出土/児玉・中村編1995、藤崎・中村編2006より一部改変・再実測)

帯が口縁部に集約する、いわゆる「鳥浜貝塚下層式」との類縁性が指摘されてきた土器群である(第8図4～8;写真6下)。これらを古く見積る意見もあるが(雨宮1997、大塚2008ほか)、型式学的には後続の堂地西段階そのものと判断せざるを得ない。既に1997年の時点で児玉健一郎が論破した通り(児玉1997)、本稿でも混在と見做しておく。さらに第X層では3つ目のタイプとして、細隆(起)線文に属する土器片が出土している(第8図9～13)。ただし小片ばかりで、一様に磨耗も著しい(写真7)。このため同群もまた、幾何かの時間差を伴う可能性を考慮すべきであろう。以上から南九州隆帯文系の成立直前にあたるプレ段階として確実視できるのは、第8図1～3のみとなる。これらの焼成は堅致で、明黄褐色系を呈する個体が多い。

第X層では、二枚貝条痕は存在しなかった。ただし、第8図1・2・6に示す通り、内面側を中心に繊細な擦過痕を残す個体を数点確認できている。いわゆるナデ仕上げ時の消し忘れ痕として、一部に遺存するものである(写真6各内面)。条幅、条間ともに約1mmと繊細ながらも明瞭であり、既にユビ調整以外に何らかの硬質工具(ヘラまたは板状工具等)が出現していた可能性を指摘できる。

(2) 鹿児島県西之表市奥ノ仁田遺跡

包含層第Ⅶ層下部より、隆帯文系の前半期を主体とする草創期土器が1333点も出土している。器形は平底または丸底、丸平底の鉢形を主体とする。焼成は堅致で、器厚は8～11mm程度、色調は橙色～にぶい黄橙色系を呈する個体が多い。隆帯は幅8～10mm程度と粗大で、内弯

気味を呈する口縁部に指頭ないし指腹による爪形（爪形状押圧文）、あるいは新出の二枚貝殻頂部による押捺文を付す個体が特徴的である（児玉2008p32ほか）。

第9図1は胴部外面下半部において、斜位に連続する条痕様の調整痕が報告図上で示される事例である。ただし筆者が2019年に実施した実地調査では、これらの条線は各々が幅2mm前後の独立した深い傷状痕から成るもので、二枚貝条痕と認定できるものではなかった（写真8）。かつて村上昇がケズリと表現した例であるが（村上2003p19）、ここでは先端の鋭利なヘラ状工具による搔取り調整ののち、ナデで仕上げられたものと判断しておく。原体確定は今後の課題としておこう。

一方、同年の資料調査で、二枚貝条痕を残す個体を僅かに1点ながら抽出できた（第9図2）。外縁に微隆帯を配する低平高台底で、底径は8.4cmを測る。もっとも、同資料が出土した第Ⅶ層の上部では早期土器の混入も報告されており、現状で、この資料が隆帯文系の前半期に属するという確証を得ることはできない。

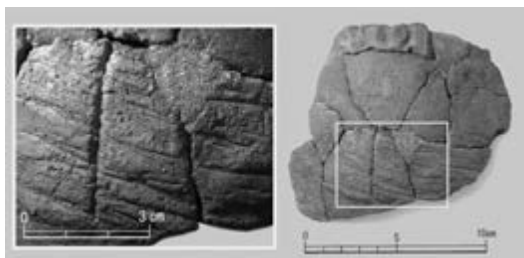


写真8 隆帯文系Ⅱ期の擦過痕
（西之表市奥ノ仁田遺跡出土/西之表市蔵/筆者撮影/第9図1）

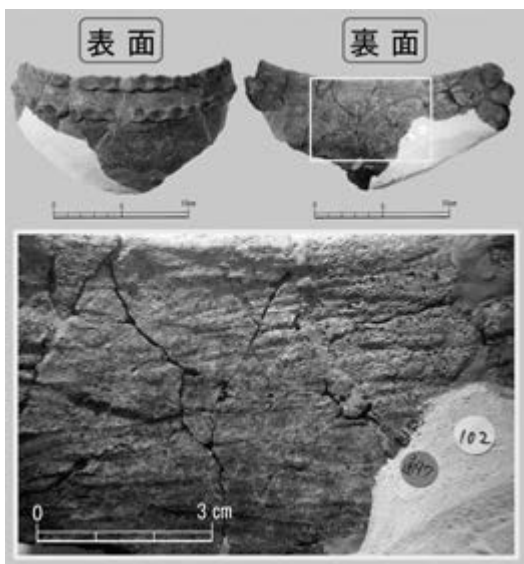
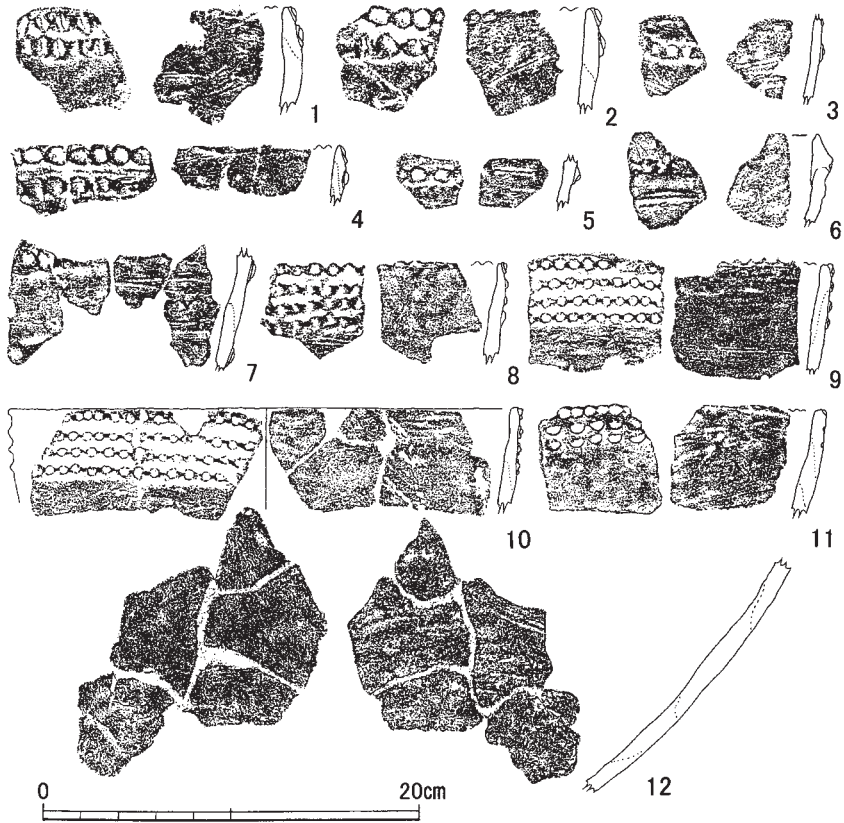


写真9 隆帯文系Ⅱ期の二枚貝条痕
（中種子町三角山Ⅰ遺跡出土/鹿児島県蔵/筆者撮影/第9図3）

(3) 鹿児島県中種子町三角山I遺跡

隆穴住居跡等の遺構群および第IV包含層から、隆帯文各段階の土器が豊富に出土している。胎土は、全般的に精良である。色調も、先の奥ノ仁田遺跡例と同様、橙色～にぶい黄橙色系を呈する。器厚は10mmと比較的厚い。既に指摘のある通り、草創期としては非常に堅致と云えるだろう。そして従来の認識通り、器面調整は99%以上が指頭痕を伴うナデ調整で仕上げられていた。第9図4・5は、型式学的にみて乙井1に近接する個体である。報告書の土器内面には擦過状の調整痕が図示されていることから、貝殻条痕の可能性が期待されたが、2019年の実地調査の結果、それらは内器面の一部に粗い擦過痕を残すものの、指頭を原体とすることが判明している。



第10図 隆帯文系後半の様相

(西之表市鬼ヶ野遺跡出土 / 西之表市蔵 / 沖田・堂込編2004より一部改変・再実測)

ただしその一方で、第9図3に示す通り、二枚貝条痕後ナデと確定できる隆帯文系古相の個体を幾片か抽出できた。隆帯は口縁部外面に二条、各々幅広く明瞭に配し、隆帯上には二枚貝殻頂部による押圧文が連続する、仮称「二枚貝殻頂部押捺文類型」に属している（秋成2014ほか）。条痕は、幅2mm前後の放射肋三条ほどで構成されており、内弯する口縁部内面に横位基調で施されたのち、一部をナデ消している（写真9）。調査の結果、三角山I遺跡では二枚貝条痕が1.9%と、極少数ながら存在することを明らかにできた¹³⁾。

(4) 鹿児島県西之表市鬼ヶ野遺跡

P-14桜島薩摩火山灰層より下位の包含層第IV層、および関連遺構内から合計千点以上もの草創期土器が出土しており、うち854点が図示公開されている。焼成は堅致である。色調は黄橙色系統に加えて、やや赤味を帯びた橙色系や灰黄褐色系を示す個体の割合が高くなる。うち二枚貝条痕の遺存が確実視される個体は10点であった。その組成率は1.2%、可能性が疑われる個体18点を加算しても3.0%に過ぎない¹⁴⁾。主要

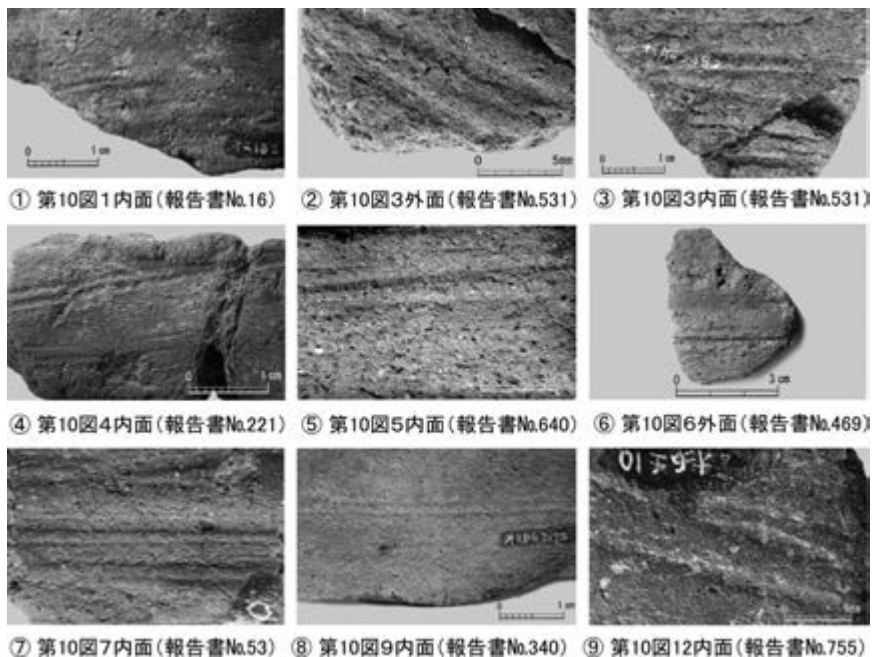
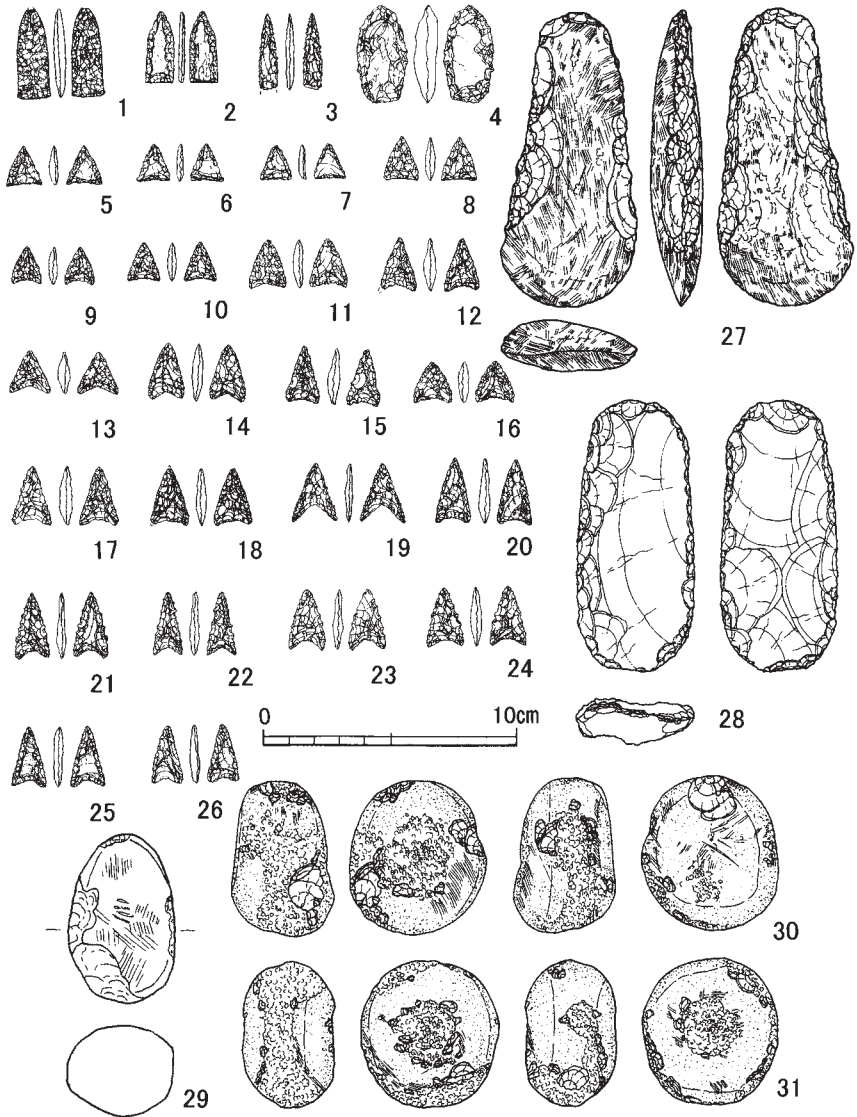


写真10 鬼ヶ野遺跡抽出の二枚貝条痕の諸例
 (西之表市鬼ヶ野遺跡出土 / 西之表市蔵 / 筆者撮影・編集)

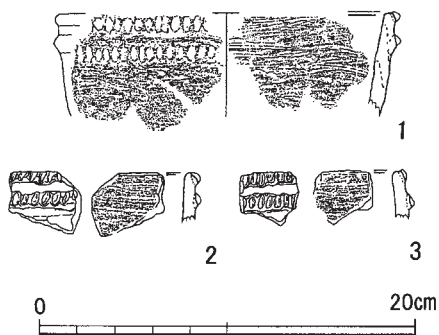


第11図 鬼ヶ野遺跡伴出の石器群
(西之表市鬼ヶ野遺跡出土 / 西之表市蔵 / 沖田・堂込編2004より一部改変)

資料群では器壁が5～7mm前後と薄手化が進行するとともに、口縁部が直立を志向しはじめる。口縁部外面に設けられた隆帯も幅狭に萎縮化が進んでおり、端部内縁の隆帯は既に消失している。これらのうち指頭爪形や指腹押捺文を維持し、口縁部が内傾気味に直立する第10図1～4は隆帯文系の中相、さらに隆帯が萎縮、細線多条化し、かつ施文原体がユビから棒状工具等へと変化する第10図8～10は、同新相段階に位置付けられよう。ちなみに、隆帯を失った第10図11のような一群は当該遺跡では稀な存在であるが、指宿市水迫遺跡第6層（下山・鎌田1999、下山編2002ほか）等で類例が認められる。水迫式期以降、草創期後葉段階の混入資料と見做しておきたい。

第10図には二枚貝条痕を残す諸例を纏めた。条数は一～三本程度、条間は1～2mm、条溝幅は平均で1.5mm程度である。その全てで最終的にナデ調整が加えられており、二枚貝条痕をそのまま放置する個体はない。口辺部調整のパターンとしては内面横位を基本とするが（写真10-①・③・⑤・⑦・⑧）、なかには斜位を志向する個体（写真10-④・⑨）や、外面に残す例（写真10-②・⑥）もある。これらは何れも一次調整痕の未払拭事例であり、隆帯文系中相段階における薄手化と、最終器面調整の若干の粗雑化、つまりナデ省略の進行が、こうした条痕生成の背景にあると考えられよう。

第11図は伴出の石器群である。当該遺跡の調査では未報告資料を含め、膨大な数の石器が出土している。なかでも多種多様の外来系石材から成る石鏃と、石皿・磨石・凹石・叩き石といった植物加工具類の多量出土は、縄文時代的な物質文化組成の先駆を意味しており、刮目に値しよう。石鏃については従来の草創期に対する認識上、一般的とされがちな小型正三角形の平基ないし緩凹基鏃が少ない（第11図5～10）。主体は全長2cm前後の二等辺三角形を志向した凹基鏃である（第11図14～26）。これは、前節でも触れたように、西四国の沿岸部に位置する乙井遺跡や奥谷南遺跡で同様に認められた傾向でもある（第4・7図）。つまり、こうした石鏃の形態や法量差は、必ずしも年代差を示唆するものではないと云えるだろう¹⁵⁾。



(5) 鹿児島県南九州市知覧町牧野遺跡

P-14桜島薩摩火山灰層よりも下位の包含層第IX～X層、および関連遺構内より合計94点の草創期土器が出土し

第12図 乙井1の類例
（南九州市牧野遺跡出土 / 鹿児島県蔵 / 福永・宗岡編2018より一部改変・再実測）

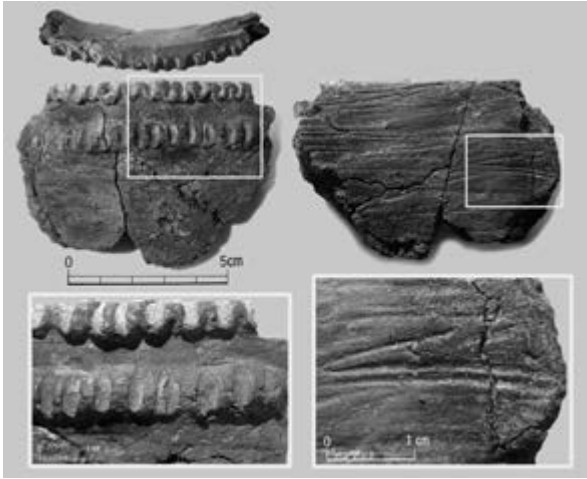


写真11 隆帯文系Ⅳ期の二枚貝条痕事例
(南九州市牧野遺跡出土 / 鹿児島県蔵 / 筆者撮影 / 第12図1)

の縦位跳ね上げ状を成す押引刻が、連続施文されている。さらに注目されるのがその内面である。図示されるように、横位の明瞭な二枚貝条痕が、ナデ調整後もかなり明瞭に残されている(写真11右下)。以下便宜上、“牧野類型”と仮称しておこう。条痕単位幅は4～5mmほどで、条幅約1mm、放射肋の条数は二～三本程度である。外器面の胴部上半にも、不完全なナデ消しに起因する横位基調の二枚貝条痕が、一部ながら窺える(写真11左下)。原体は裏面と同等である。成形では、上端に緩い平坦面を残す略ソケット状の外傾接合を観察できた。胎土中には長石・石英粒を含むが、繊維等の混和は確認できない。現状で、愛媛県乙井1に最も近い事例と認定できよう¹⁶⁾。

(6) 宮崎県都城市王子山遺跡

草創期土器片は遺物包含層第X ab層のほか、堅穴状遺構をはじめとする各種遺構内からも豊富に出土している。土器は、隆帯文系後半期～堂地西併行期までが出土している。焼成はいずれも堅致である。色調には橙色系と灰黄褐色系の二通りがある。

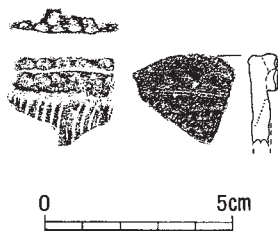
二枚貝条痕の有無であるが、今回認定できたのは第13図に示した1点のみであった(写真12)。組成比は0.3%程度に過ぎない。口縁端部に隆帯二条を収斂させる隆帯文系Ⅴ期の新相資料であり(第14図参照)、大分県森の木遺跡(綿貫編2016)の草創期隆帯文系土器群へと連絡する。口縁部外面と口唇部には二枚貝殻頂部押捺文が継承されており、かつての雨宮の見解に反し、貝殻施文が断絶しないことを証明できよう(雨宮1994)。その頸胴部外面には極めて明瞭な縦位の二枚貝条痕が(写真12左下)、

ている。うち二枚貝条痕を伴う隆帯文系土器では、第12図に示される集石遺構SOS2内出土の3点ほか、同一個体6片がある。焼成は比較的堅致であるが、先の諸事例とは異なって、暗灰黄褐色系を主体とする。器厚は7mmと比較的薄い。口縁端部外面に幅6～8mmと萎縮化した隆帯を二条貼付け、隆帯上は乙井1と類似した丸棒状工具による、隆帯下縁から上縁へ

しかもナデ調整を加えず、装飾的に放置されている。現状では極めて例外的な存在と云えるが、頸部外面の条痕は、もはや偶然の未払拭調整に起因するものではない。原体は、内外面で異なる（写真12）。外面は条数四本程度で原体幅は15mm前後、各条幅は約2mm、条間約3mmと太く明瞭である。胴部から口縁に向けて、明瞭に払い上げる（写真12左）。一種の地文効果を意識していることは疑いないだろう。対する内面側の条痕は繊細で、従来通りナデを加えて仕上げている。写真12右に示される通り、横位の二枚貝条痕が一部擦過状に残されるのみである。条数三～四本、条幅約1mm、条間約2mmと、外面側の条痕とは明らかに異なる。こうした第13図土器の出自、系譜関係の解明についても、今後の課題となろうが、後続する指宿市水迫遺跡第7層の貝殻施文（水迫式；下山・鎌田1999ほか）へと変遷する可能性が想定できる。本稿では以下“王子山類型”と仮称し、注意を促しておきたい。

† † † † † † † † †

後続の爪形文期については、従来の堂地西遺跡資料（北郷・菅付編1983ほか）等に加えて、近年、宮崎県南部域で良好な資料発見が相次いでいる。宮崎市上の原遺跡（菅付・重山編1996）、宮崎市清武上猪ノ原遺跡（井田・秋成編2009ほか）、国富町塚原遺跡（面高・竹井2001、後藤編2019）出土資料等がその代表事例である。ただし、それらの成立経緯や二枚貝条痕を普遍的に採用する水迫式、岩本式系列への連絡過程、あるいは周辺他地域との関係ともに十分な研究が進んでいないのが実状と云えよう（村上2003・2014ほか）。本稿で極少量散見できた二枚貝条痕の堂地西～南九州



第13図 東南九州域の事例
（都城市王子山遺跡出土／都城市蔵／榎畑・栗山編2012より一部改変・再実測）

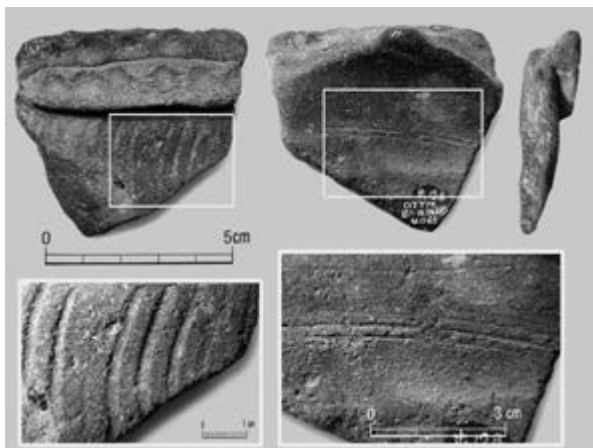


写真12 隆帯文系V期の二枚貝条痕事例
（都城市王子山遺跡出土／都城市蔵／筆者撮影／第13図）

爪形文段階（仮称Ⅵ～Ⅶ期）への継承の是非もまた、今後の新たな課題となることは疑いないところである。

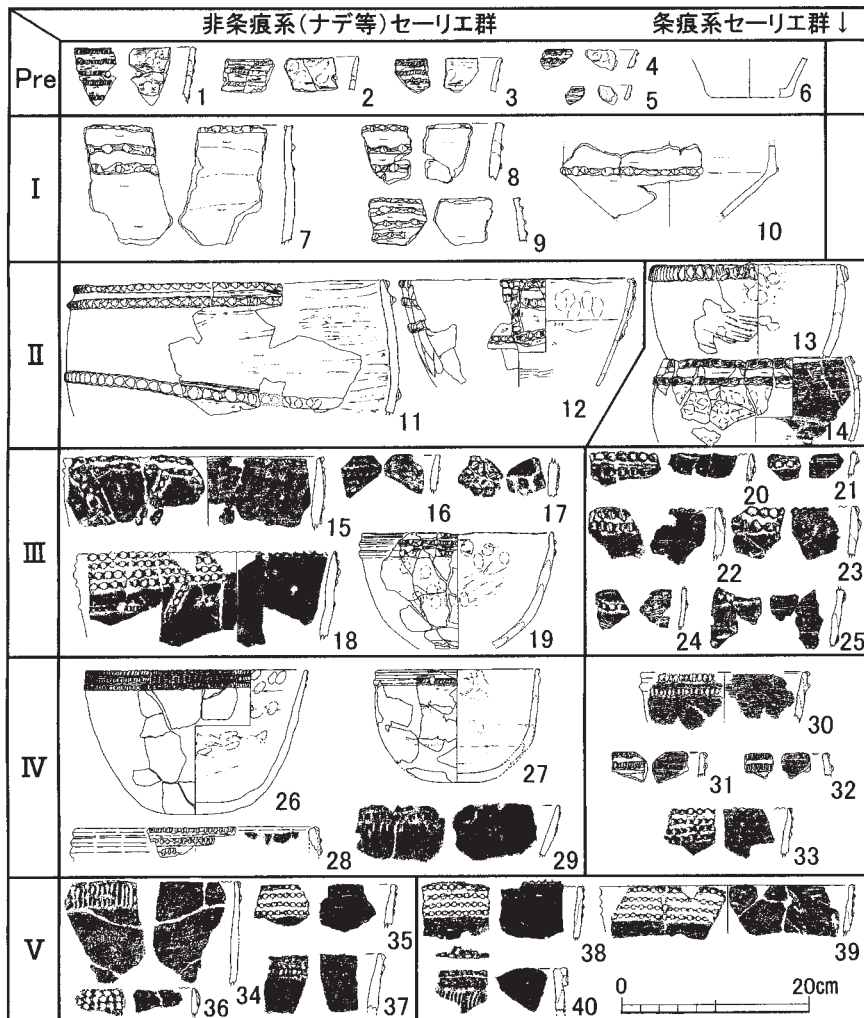
5. 編年と帰属位置

ここでは前節までの検討結果を踏まえつつ、第一に、乙井第1・2号土器の帰属時期の確定を、そして第二に、二枚貝条痕出現期の様相を、編年整理のなかから把握していこう。

南九州隆帯文系土器群の編年研究については、概ね1980年代を境とする資料の急増に伴い、以後、多くの研究者達により優れた編年研究成果が公表されてきた。直近では大塚達朗、村上昇、児玉健一郎、秋成雅博、今村結記等による成果が挙げられよう（村上2007・2014、児玉2008、秋成2014・2015、今村2018ほか）。本篇の乙井1・2のように、出土エリア内において全く類例のない資料を評価しようとする場合は、こうした南九州における長年の研究業績との対比こそが、学術上最も有効な手段と考えられる。そこで本稿では学史上の諸成果を参考としつつ、まず大塚、児玉等が注視した桐木耳取遺跡出土の資料群を隆帯文系成立以前のプレ段階に据えるものとする。さらにみてきたように、近年の西之表市鬼ヶ野遺跡や南九州市牧野遺跡、都城市王子山遺跡といった最新の最新資料群を積極的に加味しつつ、狭義の隆帯文系崩壊期（堂地西段階成立以前）までを対象に、改めて編年整理を試みたい（第14図）。以下、具体的に検討を加えていこう。

第14図の最上段は南九州隆帯文系統の成立以前として注視される、末吉町桐木耳取遺跡第Ⅹ層出土の代表事例である。前節でも触れた通り、広域地方間の交流関係が指摘される古相の一群である。器面調整では、一部内面側を中心に原体不明の繊細な横位擦過痕が看取された。器面の粗雑化に向けた萌芽が、このプレ段階で既に存在するのである。

つづく第14図の二段目は、鹿児島県南さつま市（旧加世田市）梅ノ原遺跡第Ⅵ層上部と鹿児島市掃除山遺跡のP-14桜島薩摩火山灰層下出土の資料群である（上東・福永編1998、出口編1992）。かつて雨宮、村上等が指摘した通り、現状で、南九州隆帯文系土器群のうち、最古相に位置付けられる太隆帯の一群である（雨宮1994・1997、村上2007ほか）。以下、隆帯文系Ⅰ期と仮称したい。隆帯上の押圧刺突は指頭または指腹によるもので、未だ、二枚貝や丸棒等の施工工具類は用いられていない。紙幅の都合、前節ではこのⅠ期についての検討を省略したが、図示する通り、器面は先のプレ段階と同様、内面の一部に擦過痕を認める程度で、比較的丁寧なナデ調整によって仕上げられている。該期でもまだ、二枚貝等の調整工具は発達していなかったとみら



第14図 南九州草創期における隆帯文系関連土器群の変遷

1～6末吉町桐木耳取、7～10南さつま市椿ノ原、11・13西之表市奥ノ仁田、12・14・19・26・27中種子町三角山I、15～18・20～25・29・33～36・38・39西之表市鬼ヶ野、28・37・40都城市王子山、30～32南九州市牧野（順に、長野編2005、上東・福永編1998、出口編1992、児玉・中村編1995、藤崎・中村編2006、沖田・堂込編2004、栞畑・栗山編2012、福永・宗岡編2018より一部改変、筆者作成）

れる。

第14図三段目は、隆帯文系Ⅱ期の一群である。口縁部が緩やかに内弯し、口縁と胴部には横走する隆帯文が一〜二条程度めぐらされる。以降Ⅲ期にかけて器厚は10mm前後と厚い。隆帯幅は10〜18mmと特に粗大で（児玉2008p28）、間隔を空けず、密に連続施文されるようになる。隆帯上の押圧刺突は、前段を継承した指頭・指腹押圧文に加えて、該期よりアカガイ（アナガラ）属系の二枚貝背部圧痕を付す個体が登場する。施文具に二枚貝が採用される初源期の事例と云えよう。併せて、三角山Ⅰ遺跡では極少量ながら、器面調整具として二枚貝の利用が確実視される個体を確認できた（写真9、第14図14）。条痕後には必ずナデ調整を加える。

第14図四段目は隆帯文系Ⅲ期の一群である。本稿では、ここまでを隆帯文系統の古相と措定する。口縁部は内弯の度合いが弱まり、直口を呈する個体が大部分となる。横位基調の隆帯文が口縁部を中心に密集してめぐらされるようになる。口縁部の隆帯は二〜四条で、多条化の兆しをみせる。隆帯幅は8〜12mm程とやや細い。器面調整は原則ナデであるが、今回の資料調査で、Ⅲ期の南九州では条痕等の調整痕を残す個体が複数存在する事実を明らかにできた。ただし、該期でもまだ最終器面調整として“ナデ仕上げ”を意識する傾向が強く、条痕や、擦過の痕跡をそのまま放置する例は存在しない。こうした特徴は、かつて鈴木正博が「横道系列」と称して認識を促した福岡県横道遺跡出土の隆帯文系土器の特徴とも通ずる（鈴木2005）。

第14図五段目は隆帯文系の新相段階、本稿でⅣ期とする一群である。乙井1との併行関係が想定されるのは、この時期である。口縁が直口、ないしは緩外反形を呈する浅い深鉢、あるいは鉢形で、隆帯の横走施文は口縁部のみとなる。隆帯は三条前後である。隆帯幅が5〜8mm程と一層萎縮化することで、隆帯間には新たに5〜10mm程の空白が生ずる。器面調整は前段に引き続きナデ仕上げを原則とするが、牧野遺跡や鬼ヶ野遺跡の事例から、該期になると、口辺部内面側を中心にナデ調整後も二枚貝条痕や擦過痕等を明瞭に残す、仮称“牧野類型”が登場することを指摘した。乙井1の二枚貝条痕は、こうした南九州隆帯文系Ⅳ期の一群との強い影響関係のなかで生じたと捉えるべきであろう。もっとも、今日周知される該期南九州の遺跡のなかで、こうした二枚貝条痕土器を主体的に出土する遺跡事例は存在しない。従って、現状ではまだ未知の隆帯文系の一派が潜在する可能性が高いと筆者は捉えている。なお、こうした器面調整法の変化に伴い、器厚が7〜8mm前後とやや薄手化する。底部は平底ないし平丸底が前段を継承して主勢を維持するが、東南九州側では既に高台底が定着している。乙井2の底部片についても、概ねこのⅣ期前後の時期に帰属する可能性が高いであろう。

第14図最下段は隆帯文系の新相、本稿でⅤ期と位置付ける段階である。児玉2008

の「隆帯文Ⅲ期」にはほぼ該当する。口縁部は直口ないし緩外反形で、施文は、口縁部上縁に収斂させるようになる。文様は、該期より二系統に分岐する。一つはⅣ期新相で登場する細隆帯の多条化傾向を継承する一群で（第14図35・38・39）、複数条から成る細い横走隆帯は幅3～5mm程度と一層の萎縮化が進行する。もう一つの系統は、口縁部文様帯の施文範囲が上下に圧縮化され、縁帯文化する一群である（第14図29→34→36・37・40）。宮崎県王子山遺跡では第13図に示した仮称、王子山類型、すなわち殻頂部刺突文の存続に加え、二枚貝条痕を地文として意図的に配する事例が確認できたが（写真12）、現状では類例に恵まれない。該期は、指宿市水迫遺跡（下山・鎌田1999ほか）等の事例からP-14桜島薩摩火山灰の降灰期前後に相当する時期とみられ、錦江湾周辺では遺跡が殆ど発見されなくなる（新東1995b・1997・1999p20-21、雨宮1996p27ほか）。新東や雨宮の指摘以後に報告書が刊行された種子島の鬼ヶ野遺跡のなかには、極少量ながら後続する水迫第6層段階に類する個体があり、今回の調査では第10図11のように二枚貝条痕の存続を確認できている。未だ実態が不明瞭な南九州爪形文期を含め、水迫式以前における二枚貝条痕の存否は、今後の大きな課題の一つとなろう¹⁷⁾。

6. 結語 —成果と課題—

以上の検討結果から、まず、乙井第1・2号土器が縄文草創期に帰属することが確実となった。南九州隆帯文系に由来する草創期中葉の土器片であり、同系統のⅣ期と併行しよう。現時点で、西日本の環瀬戸内海沿岸域において、該期にまで遡る土器の類例は皆無であり（第6図）、本例を“瀬戸内最古”と認定できるだろう。

上記の結論を導出するため、今回の調査では二枚貝条痕を伴う隆帯文系土器の存否について、特に多くの歳月を費やしてきた。それは、該期前後の西日本ではまだ、二枚貝条痕は存在しないとする従来の学界認識に対する挑戦でもあった。

そして2012年以降の断続的調査の結果、南九州では隆帯文系Ⅱ期に二枚貝その他の条痕調整が口辺部内面を中心に萌芽し、以降、組成比3%未満という極少量の割合で存続すること、加えて、後続のⅢ～Ⅳ期では器壁の薄手化とともに器面調整が粗雑化し、深鉢・鉢の口辺部を中心に、条痕や擦過痕を残す割合が幾分増加してくる事実を明らかにできた。さらにⅤ期の都城市王子山遺跡では、単に器面の条痕を払拭するのではなく、むしろ明瞭に残そうとする個体を抽出できたことから（第14図30～32・40等）、水迫式成立に向けて、二枚貝条痕を地文とする新たなセーリエの萌出を認めた次第である。今後は、こうした未知の亜流型式（仮称、牧野類型や王子山類型）が、南九州～西部瀬戸内を結ぶ古豊後水道沿いの何処かで、主体的に発見される可能性も



第15図 縄文時代草創期 古燧灘への水道形成と海上交通路の発達
(勅使河原2013古地図を基に本稿成果を加味して、筆者作成)

高いと推察しておく¹⁸⁾。

以上の南九州における特徴からは、上黒岩岩陰遺跡等、これまで西四国の山間部で確認されてきた隆（起）線文系土器群とは明らかに系譜が異なることを、改めて認識させられる。そして西四国域では、そうした多系統容認を生む背景として、該期前後の古瀬戸内海の形成と、早期に向けた低地部沿岸域を拠点とする新たな生業集団の出現が、少なからず関与しはじめていたことを考慮すべきであろう（第15図）。近年、村上昇が説く「中四国地域の遺跡は山間部の限られた範囲に見られる傾向」や、「有舌尖頭器の分布も山間部に多い」とする見解（村上2006p16-18）が、実は山間部型集団の特質を示唆していたとするならば、本稿における乙井第1・2号土器の認識により、今後は、古四国島内における草創期後半以降の生業集団の、定住環境の差に起因した多様化傾向についても、一層意識を深めていく必要がある。

さらにこのことは、晩氷期の気候変動に伴い創生される、古豊後水道に沿った“海”を介した南九州縄文文化との新たな交流開始をも、同時に示唆していよう。既に、中間温帯林相のなかで成熟期に達しつつあった南九州先進の草創期文化が、温暖化の進展と古豊後水道の形成、あるいはP-14薩摩火山灰を噴出した桜島大爆発後の環境変

化とも重なって、次第に北方へと活動域を拡大した可能性が思料される（雨宮1994、新東1999、工藤2011ほか）。積極的な植物採集と加工技術の伝播、さらには“海”を意識した縄文文化そのものを西部瀬戸内や西南四国の沿岸各地へともたらしただのである。この草創期中葉、隆帯文系後半の時期に、南九州と西部瀬戸内とを結ぶ航路が形成されつつあったことは、先に紹介した南九州種子島の、鬼ヶ野遺跡における姫島産黒曜石製鏃の出土事例（写真3）からも、既に明白であろう。

このように、海を意識した瀬戸内の縄文文化成立の背景に、南九州の隆帯文文化が関与していたとするのが、本稿の、草創期土器認定を通じた最後の結論である。この事実は、草創期以後の中国、四国地方における臨海型集落の系譜や性格、あるいは山間型集落との生業形態の相異、すなわち縄文早期以降に向けた多様性を解明していくうえでも今後、看過できない重要テーマの一つとなり得るであろう。乙井第1・2号土器は、まさに瀬戸内の縄文文化の出発点を象徴する一級の文化財だったのである。

もっとも、本稿で掲げた南九州域の条痕を伴う隆帯文系土器の諸例と、乙井第1・2号土器は製作流儀等、幾つかの厳密な属性レベルにおいて合致しない部分が、未だ複数箇所にわたり認められる。そもそも草創期中葉前後の段階において、九州周縁の何処で、最初に二枚貝条痕が定着しはじめたのか。今後の類例増加を期待しつつ、将来に向けたより本格的な考察の機会を窺いたい¹⁹⁾。

【謝辞】

本稿作成にあたり、松山市埋蔵文化財センターおよび松山市考古館の方々からは特別のご配慮と、全面的なご協力を賜った。さらに南四国、および南九州における各自治体や博物館等の専門スタッフの方々からも資料調査の便宜と、貴重な御意見を頂戴してきた。記して感謝の意を表したい。

【註】

- 1) 後節検討する南九州種子島の鬼ヶ野遺跡等における状況を鑑みるならば、こうした「不自然な自然礫」のうちに植物加工系の礫器等が含まれていた可能性は完全には否定できないだろう。
- 2) 乙井遺跡では、調査対象域の一部分のみで緊急発掘事業を終えている（水本編2012p111-112）。本稿発表を契機に、今後は、葉佐池丘陵縁辺部周囲の新たな学術調査（発掘、踏査等）が、逆に妙味を増そう。
- 3) ただし隆帯三段目右下の三箇所については長楕円形を成す刺突のまま、留めている。
- 4) 兵頭鏃は2018年最新の資料集成的なかで、この第3図3を手向山式と評価しており、筆者とは多少見解が異なる（兵頭・幸泉2018）。また愛媛県内では他に上黒岩岩陰遺跡で第3群として、これに近いタイプの土器片1点が、穂谷式として報告されている（春成・小林編2009p85No253）。しかしながら、何れも層位不明資料であり、再考の余地もあろう。
- 5) 草創期後葉に比定される宮崎県北方町の蔵田遺跡では、出土土鏃中、既に挟りの深い凹基鏃が含まれている（谷口ほか編1995）。
- 6) 周知の通り、種子島では良好な剥片系石器素材に恵まれない。鬼ヶ野遺跡で出土した多量の石鏃はその大半が島外の、しかも、多様な素材（白色珪質系を含む各種頁岩、安山岩、各種チャート、姫島産を含む

各種黒曜石、粘板岩、變成砂岩、デイサイト)で構成されていた。このことは、後節第15図でも示す通り、温暖化に伴う海上交通の発達と、多方面からの人的交流が背景にあると推定できよう。一方で、大分県姫島を唯一の原産地とする乳灰白色の姫島産黒曜石製石器の存在は、従来、殆ど注視されることはなかった(芝2014ほか)。けれども当該事例は古豊後水道を介した西部瀬戸内域と、種子島を含む南九州周辺との交流が、草創期中頃の隆帯文期には既に存していたことを証明するものであることは事実である。従来の、姫島産黒曜石の広域利用は早期以降とする見解(宮内2003、立神2003ほか)を大きく遡る事例なのである。姫島産黒曜石の流通実態についても、何れ再考の時期が訪れよう。

- 7) 西部瀬戸内では後期旧石器の頃よりサヌカイトの流入が盛んである。つまり、第4図に示したサヌカイト製石器の一部についても、草創期にまで遡る可能性を否定できないと云えるだろう。
- 8) 第4図8と9は同じ白色珪質系の頁岩製であるが、9には編状の節理が顕著に認められるのに対し、8では確認できない。つまり、両者は別素材である。
- 9) このほか谷口康浩によると、愛媛県中津川洞窟遺跡で草創期後半の多縄文系土器が出土したとされ、同土器型式の最西端事例とまで評価されている(谷口2008p52)。しかしながら実態不明で、筆者も未だ実見できていない。
- 10) 唯一、香川県坂出市与島の羽佐島遺跡 C10-1南東ピット内から石槍と共伴した無文土器口縁部片が、草創期後葉～早期前葉に比定される程度である(秋山・渡部・真鍋編1984p407)。
- 11) 一方で、隆帯文期の南九州では細石器が伴わないことが古くから指摘され、注目されてきた(兩宮1992・1994・1997、新東1999、工藤2011、芝2014ほか)。このことは、南九州の隆帯文段階が北部九州における隆(起)線文系や爪形文段階よりも新しいとする論拠にも、一部で繋がっている。しかしながら、南九州では新石器的な石器製作技術やその組成が土器の出現に先行する可能性が、近年指摘されており(Morisaki and Sato 2014)、新石器化の階梯が、列島全土で一様と見做すのは尚早に過ぎる可能性もたれる。いま、奥谷南遺跡 SX101における両者の共伴関係を素直に評価するならば、将来的には、こうした組成差を南太平洋黒潮流域をめぐる地方差と換言できる日が来るかもしれない。
- 12) 1996年、河口貞徳は宮崎県の最南端、串間市の大平遺跡第5・4層や、薩摩半島側の南さつま市金峰町外城遺跡出土土器を理由に、隆帯文系成立前後における二枚貝条痕の出現を論じている(河口1996p7-9)。ただし、紹介される土器片はいずれも小片ばかりで、図示される条痕土器胴部片4点は草創期後葉の水迫式～岩本式に属する可能性が払拭できない。つまり、認定が難しいのである。これに対し、鈴木正博による福岡県久留米市の横道遺跡(近藤編2001)出土の小片2点は、存在が確実視できる北部九州唯一の事例である(鈴木2005p5-6)。隆帯上に貝殻腹縁押捺を加えたための隆帯を、縦横に貼り付けるタイプである。器形および隆帯文の特徴から、時期は、概ね後節第14図で示す隆帯文系Ⅲ期に併行するとみられる。鈴木は、土器内面において器面調整としての「二枚貝条痕後ナデ」が定着していることを指摘する。そして氏は「横道系列」と称して、南から北への影響も考慮すべきだと結ぶのである。もっとも、二枚貝条痕の出現経緯等に関する詳しい言及は、未だ成されていない。
- 13) 石器製作工具としての二枚貝の利用開始が、海との関係開始のなかで説明できるとすれば、瀬戸内海の形成過程とも無縁、無縁ではないはずである。それは、まさしく二枚貝条痕誕生の歴史であり、早期に向けた多様性と条痕文発達の淵源を探るうえでも、看過できない課題と云えそうである。
- 14) このほか鬼ヶ野遺跡出土土器中からはヘラ状工具による明瞭な擦過痕を残す個体が40点(4.7%)、搔取り痕を残す個体2点(0.2%)、ケズリ調整痕を残す個体1点(0.1%)が別途確認できている。
- 15) そうした意味で乙井遺跡出土の石鎌の一部も、草創期に帰属する可能性は少なくないと捉えるべきであろう。つまり、山間部を中心に分布する小型正三角形平基(または緩凹基)鎌を志向する集団に対し、臨海域では種子島の鬼ヶ野遺跡を典型とする中型二等辺三角形を呈する凹基鎌を志向する集団が並立していた可能性である。細石器群の消滅を九州内で一律と捉えようとする芝等の見解とは対照的となるが(芝2014ほか)、こうした違いは、早期に向けた狩猟対象や技術的な流儀の違いを反映している可能性が否定できないと筆者は捉えている。その使用痕の態様等、今後一層注意を要するであろう。

- 16) このほか宮崎県川南町尾花 A 遺跡の包含層中からは、縄文早期の轟 B 式土器に混じって、些か異色を放つ No.597 が出土している（岸田・竹田編 2009p120）。2019 年の実地調査では乙井 1 の類例となる可能性は低いと判断したが、現状では類例に恵まれないため、ひとまず保留しておく。
- 17) 報告書でも、「共存する関係と理解するよりは、時間的な差異として考えることが妥当ではないか」と結ばれている（長野編 2005p514）。なお大塚は桐木耳取遺跡出土の「細い隆帯文（隆線文）」土器を“九州的ではない隆起線紋系土器”としている。すなわち、鳥浜下層式以前と評価し（大塚 2008p244）、児玉もまた同資料を隆帯文系 I 期と設定しているのである（児玉 2008p30）。ただし伴出土器や出土状況の評価等、南九州内部での科学的論拠に欠けるのが現状である。仮に、東方に広く分布する「隆起線文土器の分枝」と見做す麻生優・白石浩之の広域編年論（麻生・白石 1986）に依拠するにしても、南九州独自の地域展開という認識を欠いた議論は好ましくないはずであろう。
- 18) このほか出土状況や帰属層位等、実態不明瞭ながらも古豊後水道に面する愛媛県平城貝塚遺跡出土の“隆帯文系土器”の存在も、見逃さない（西田 1954p123 図版五：最右列上から八番目）。
- 19) かつて、雨宮も南九州草創期土器群の系統編年を手掛けるなかで、「各地域における土器の展開を踏まえなければ、土器の類似性だけで地域を越えて点と点を結び付けることは難しい」と述べている（雨宮 1997p21）。

【参考文献】

- 秋山 忠・渡部明夫・真鍋昌宏編 1984『羽佐島遺跡(I)』香川県教育委員会
- 秋成雅博・今村結記編 2009『清武上猪ノ原遺跡第 5 地区』宮崎県清武町教育委員会
- 秋成雅博 2014「宮崎平野部の貝殻押圧文土器について」『宮崎県史地域の考古資料に関する編年の研究』宮崎考古学会 3-12頁
- 秋成雅博 2015「宮崎県における縄文時代草創期研究の現状」『宮崎県文化講座研究紀要』第 42 輯、宮崎県立図書館 1-18頁
- 麻生 優・白石浩之 1986「縄文時代草創期」『縄文土器の知識 I』東京美術 37-49頁
- 雨宮瑞生 1992「南九州縄文草創期資料の新旧関係」『古文化談叢』第 28 集、九州古文化研究会 99-103頁
- 雨宮瑞生 1994「南九州縄文時代草創期土器編年」『南九州縄文通信』No.8、南九州縄文研究会 1-12頁
- 雨宮瑞生 1997a「縄文土器の誕生と成長」『月刊文化財』10月号、文化庁文化財保護部文化財保護委員会・第一法規出版 16-21頁
- 雨宮瑞生 1997b「南九州縄文時代草創期土器編年（補遺）」『南九州縄文通信』No.11、南九州縄文研究会 21-30頁
- 井田 篤・秋成雅博編 2009『清武上猪ノ原遺跡 2』宮崎県清武町教育委員会
- 今村結記 2018「東南九州の縄文時代草創期土器群」『九州旧石器』、第 21 号、九州旧石器文化研究会 5-16頁
- 上田龍児編 2017『乙金地区遺跡群 16』福岡県大野城市教育委員会
- 大塚達朗 1990「隆帯文の比較から見た九州と本州－序章－」『縄文時代』第 1 号、縄文時代文化研究会 1-25頁
- 大塚達朗 2008「広域編年と土器情報」『縄文時代の考古学 7』同成社 239-253頁
- 面高哲郎・竹井真知子編 2001『松元遺跡・井手口遺跡・塚原遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター
- 沖田純一郎・堂込秀人編 2004『鬼ヶ野遺跡』鹿児島県西之表市教育委員会
- Okuno, M., Nakamura, T., Moriwaki, H. and Kobayashi, T. 1997. AMS radiocarbon dating of the Sakurajima tephra group, Southern Kyushu, Japan. Nuclear Instruments and Methods in Physics Research Section B: Beam Interactions with Materials and Atoms, 123; pp.470-474.
- 遠部 慎 2003「黄島貝塚再考」『考古学論集 III』立命館大学考古学論集刊行会 15-30頁
- 上東克彦・福永裕祐編 1998『柞ノ原遺跡 第 1 分冊』鹿児島県加世田市教育委員会

- 河口貞徳 1982「鎌石橋遺跡」『鹿児島考古』第16号、鹿児島考古学会 44-45頁
- 河口貞徳 1994「南九州草創期の隆帯文土器」『鹿児島考古』第28号、鹿児島県考古学会 4-26頁
- 河口貞徳 1996「南九州における草創期・早期縄文土器の編年について」『鹿児島考古』第30号、鹿児島県考古学会 4-23頁
- 岸田裕一・竹田享志編 2009『尾花 A 遺跡 I』宮崎県埋蔵文化財センター
- 北郷泰道・菅付和樹編 1983『宮崎学園都市埋蔵文化財発掘調査概報 (IV)』宮崎県教育委員会
- 工藤雄一郎 2011「東黒土遺跡の堅果類と縄文時代草創期土器群の年代に関する一考察」『考古学研究』第58巻第1号、考古学研究会 54-65頁
- 工藤雄一郎 2018「縄文時代草創期の古環境と14C年代」『九州旧石器』第21号、九州旧石器文化研究会 1-4頁
- 栗田茂敏編 2010『葉佐池古墳-3・4・5次調査-』松山市教育委員会・松山市埋蔵文化財センター
- 柴畑光博 2008「轟式土器」『総覧縄文土器』アム・プロモーション 328-335頁
- 柴畑光博・栗山葉子編 2012『王子山遺跡』宮崎県都城市教育委員会
- 柴畑光博 2015「西之菌式土器小考」『本田充輝先生退職記念論文集』本田充輝先生退職記念事業会 23-33頁
- 柴畑光博 2017「火山災害への狩猟採集社会の対応」『考古学研究』第64巻第2号、考古学研究会 9-23頁
- 柴畑光博 2019「九州における草創期土器編年研究の現状と課題」『九州における縄文時代草創期研究の到達点』第29回九州縄文研究会資料集 26-35頁
- 見玉健一郎・中村和美編 1995『奥ノ仁田遺跡・奥嵐遺跡』鹿児島県西之表市教育委員会
- 見玉健一郎 1997「南九州隆帯紋土器に関する「隆起線紋土器の縦横連鎖構造論」をめぐって」『鹿児島考古』第31号、鹿児島県考古学会 28-39頁
- 見玉健一郎 1999「南九州を中心とする隆帯文土器の編年」『鹿児島考古』第33号、鹿児島県考古学会 137-150頁
- 見玉健一郎 2001「旧石器時代から縄文時代へ-南九州の場合-」『第四紀研究』第40巻第6号、日本第四紀学会 499-507頁
- 見玉健一郎 2008「南九州隆帯文・爪形文系土器」『総覧縄文土器』アム・プロモーション 28-33頁
- 後藤清隆編 2019『塚原遺跡II』宮崎県埋蔵文化財センター
- 近藤康治編 2001『横道遺跡II』福岡県久留米市教育委員会
- 芝康次郎 2014「九州における縄文時代草創期石器群の広域連動」『物質文化』94、物質文化研究会 29-52頁
- 島 弘編 2016『天久貝塚』沖縄県那覇市文化財課
- 下山 覚・鎌田洋昭 1999「水迫式土器の設定」『ドキドキ縄文さががけ展』鹿児島県指宿市教育委員会
- 下山 覚編 2002『水迫遺跡II』鹿児島県指宿市教育委員会
- 新東晃一 1995a「南九州の初期縄文文化」『季刊考古学』第50号、雄山閣 56-61頁
- 新東晃一 1995b「南九州の火山噴火と遺跡の古環境」『南九州縄文通信』No.9、南九州縄文研究会 37-48頁
- 新東晃一 1997「薩摩火山灰と縄文草創期文化の動態」『人類学研究』第9号、人類史研究会 95-103頁
- 新東晃一 1999「南九州の特殊性」『季刊考古学』第69号、雄山閣 18-22頁
- 新中なるみ 2009「農セの押型文土器について」『中屋・荒田・桜谷遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター 282-286頁
- 菅付和樹・重山郁子編 1996『椎屋形第1遺跡・椎屋形第2遺跡・上の原遺跡』宮崎市教育委員会
- 鈴木正博 1994「黒潮と加治屋園式土器」『古代』第98号、早稲田大学考古学会 31-34頁
- 鈴木正博 2005「西ノ園への想い」『九州縄文時代早期研究ノート』第3号、九州縄文時代早期研究会 1-6頁
- 鈴木保彦 1982「草創期の土器型式」『縄文文化の研究』3、雄山閣 44-65頁

- 関 明恵ほか編 2009『中尾・荒田・桜谷遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター
- 高橋信武編 1993『宇佐別府道路・日出ジャンクション関係埋蔵文化財調査報告書』大分県教育委員会
- 立神勇志 2003「鹿児島県・宮崎県の縄文時代早期における姫島産黒曜石裂石器出土遺跡」『Stone Sources』
No.3、石器原産地研究会 103-106頁
- 谷口武範ほか編 1995『打扇・早日波・矢野原・蔵田遺跡』宮崎県教育委員会
- 谷口康浩 2008「多縄文系土器」『総覧縄文土器』アム・プロモーション 46-53頁
- 出口 浩編 1992『掃除山遺跡』鹿児島市教育委員会
- 勅使河原彰 2013『ビジュアル版 縄文時代ガイドブック』新泉社
- 堂込秀人 2019「種子島の草創期遺跡」『九州における縄文時代草創期研究の到達点』第29回九州縄文研究会資料集 65-79頁
- 中越利夫 1991「帝釈峡遺跡群の押型文土器」『縄文時代』第2号、縄文時代文化研究会 184-193頁
- 永友良典編 1985『堂地西遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター
- 長野真一・中島哲郎編 1978『岩本遺跡』鹿児島県指宿市教育委員会
- 長野真一編 2005『桐木耳取遺跡Ⅰ』鹿児島県立埋蔵文化財センター
- 西田 栄 1954「平城貝塚調査略報」『愛媛大学紀要』第一部第二巻第一号、愛媛大学 120-132頁
- 春成秀爾・小林謙一編 2009『研究報告』第154集、国立歴史民俗博物館
- 肘岡隆夫編 2000『縄文のあけぼの』鹿児島県黎明館
- 日高孝治 1999「宮崎県における縄文時代草創期の様相」『鹿児島考古』第33号、鹿児島県考古学会 121-135頁
- 兵頭 勲編 2005『上黒岩岩陰遺跡とその時代』愛媛県歴史文化博物館
- 兵頭 勲・幸泉満夫 2018「愛媛県の外来系土器集成」『中四国地方の外来系土器』中四国縄文研究会第29回島根大会資料 177-204頁
- 福永修一・宗岡克英編 2018『牧野遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター
- 藤崎光洋・中村和美編 2006『三角山遺跡群（3）』鹿児島県立埋蔵文化財センター
- 松村信博・山本純代編 2001『奥谷南遺跡Ⅲ』高知県文化財団埋蔵文化財センター
- 松本 茂 2002「第Ⅸ章1-B-a 第Ⅸ層の土器」『建昌城跡』鹿児島県始良町教育委員会 403-404頁
- 水本完児編 2012『北梅本乙井遺跡』松山市埋蔵文化財センター
- 宮内克巳 2003「大分県旧石器～縄文時代遺跡出土の姫島産黒曜石」『研究紀要』4、大分県立歴史博物館 1-12頁
- 村上 昇 2000「九州地域に於ける縄文時代草創期土器編年試論」『南九州縄文通信』No.14、南九州縄文研究会 1-16頁
- 村上 昇 2003「柏原式の諸属性を巡る問題素描」『九州縄文時代早期研究ノート』第1号、九州縄文時代早期研究会 18-22頁
- 村上 昇 2004「近畿地域出土隆起線文土器の位置付け」『九州縄文時代早期研究ノート』第2号、九州縄文時代早期研究会 1-10頁
- 村上 昇 2005「南九州縄文草創期土器の底部についての覚書」『九州縄文時代早期研究ノート』第3号、九州縄文時代早期研究会 7-10頁
- 村上 昇 2006「日本列島西部における晩水期の様相」『九州縄文時代早期研究ノート』第4号、九州縄文時代早期研究会 15-18頁
- 村上 昇 2007「日本列島西部における縄文時代草創期土器編年」『日本考古学』第24号、日本考古学協会 1-20頁
- 村上 昇 2014「九州における瓜形文土器の編年上の位置づけについて」『物質文化』第94号、物質文化研究会 75-84頁
- Morisaki, Kazuki and Hiroyuki, Sato. 2014. Lithic Technological and Human Behavioral Diversity Before and

During the Late Glacial; a Japanese Case Study. *Quaternary International*, 347 : pp.200-210.

森田浩史・森畑光博 1997「宮崎県縄文時代草創期の土器について」『宮崎縄文研究会資料集』1、宮崎縄文研究会 16-17頁

綿貫俊一編 2016『森の木遺跡発掘調査報告書』大分県埋蔵文化財センター